

# 松前町 郷土資料館 研究紀要

第1号

2024.3

北海道松前町教育委員会

表紙題字

松前町文化財保護審議会 会長／大洞山 法幢寺 三十一世 木村 清韶



## 研究紀要の初刊にあたって

北海道最南端、津軽海峡に面する松前町は、縄文時代から現在に至るまで重層的な歴史を有しております。

旧石器時代の遺跡こそ未確認ではあるものの、白坂遺跡に代表されるように縄文時代早期から人の営みがありました。縄文時代前期～中期では大規模集落である東山遺跡、縄文時代後期では日本海側の貝塚として重要な寺町貝塚、縄文時代晚期では当時の墓域であった上川遺跡が知られています。続縄文時代の遺跡としては大尽内遺跡、擦文時代では竪穴住居から平地式住居への変遷が確認できる札前遺跡が知られ、続く中世の遺跡としては和人の拠点であった大館跡が国指定史跡として保護されております。

そして近世、松前藩主松前家の居城である福山館（後の福山城）が築かれ、日本最北の城下町としていわゆる北前船交易により賑わいを見せました。明治以降、廃城となった福山城跡は民地として払い下げられ城跡は荒廃していましたが、松前町では昭和50年度以来、土地の公有化と繩張りの復元整備を進め、現在は石垣整備に重点を置いた史跡松前氏城跡福山城跡保存整備事業を推進しております。

こうした遺跡の存在から、当地には連綿と人々が住み続けてきたことがわかります。そして人々が保存伝承してきた郷土芸能も、松前町の歴史を語る上で欠かせない文化財となっています。松前藩主の庇護のもと成立した国指定重要無形民俗文化財の松前神楽、近江商人がもたらしたとされる北海道指定無形民俗文化財の松前祇園ばやし、各集落の人々が受け継いできた松前町指定無形民俗文化財の松前追分節・松前三下り、月島奴振り、白神タナバタ、江良杵振舞、松前沖揚げ音頭、いずれも城下町松前ならではの演目と言えるでしょう。

松前町のシンボルは福山城だけではありません。沖に浮かぶ松前小島・渡島大島は国指定天然記念物であり、オオミズナギドリをはじめとした海鳥類の営巣地となっております。また、渡島大島は寛保大津波の原因となった火山島としても知られ、歴史学、地質学、火山学など多くの分野で研究対象として注目され続けております。

これらの他にも、日本最古の写真である銀板写真や、城下で作刀された刀剣、仏像や古文書など、数えきれないほどの文化財が所在しておりますが、調査研究の緒に就いていないものも多く、今後に期待するところが大きいと言えます。

このたび、昭和50年に開館して以来、初となる松前町郷土資料館研究紀要の刊行に至りました。松前町の歴史をさらに深化させる調査研究が行われることを祈念して、発刊の挨拶といたします。

令和6年3月

松前町教育委員会  
教育長 宮 島 武 司

## 目次

### 《特別寄稿》

松前町文化財保護審議会のあゆみ

木村 清韶 ..... 1

### 《特別寄稿》

発掘調査あれこれ

久保 泰 ..... 5

### 《論文》

聖山式土器文化圏の葬墓制

関根 達人 ..... 13

### 《研究ノート》

文化財火災時の情報伝達—松前奉行所跡・福山城（松前城）天守焼失の顛末—

佐藤 雄生 ..... 41

### 《資料／研究動向》

藤本菓子店旧蔵の菓子木型について

西川 萌 ..... 53



# 松前町文化財保護審議会のあゆみ

The History of Matsumae Town Council for the Protection of Cultural Properties

木村 清韶\*

Seisho KIMURA\*

キーワード：近代、北海道松前郡松前町、文化財保護

## 1. 文化財保護審議会

昭和 52 年 4 月 1 日町の「文化財保護条例」が、それまでの昭和 31 年制定の「文化財保存に関する条例」にかわる形で施行された。

この条例の第 4 条に「審議会を置くこと」が定められており、審議会の委員は 5 名以内とし任期 2 年と定められている。

第一回の文化財審議委員会は岡本清治教育長のもと、昭和 52 年 5 月 17 日に開催された。審議委員は吉田勝美（会長）、堀川弘（副会長）、石川佳伸、石山善太郎、木村清韶でした。

木村委員以外は全て故人になりましたが、その都度四名の委員が選任され今日まで継続されており、町文化財行政に対し一定の役割を果たして来ています。

北海道の町村で松前町ほど多くの文化財を保有している町は他にありません。北海道が蝦夷地と呼ばれる日本の歴史の中に初めて登場してから松前は政治、経済、文化の中心地として数百年の歴史を有し、近世の松前藩成立以前よりの神社仏閣、福山館から松前城（福山城）等の歴史的遺産を多く残しています。

これにともない古文書や書画、刀剣や武具、道具類、そして松前神楽や郷土芸能、祭礼等に用いられる諸道具、人形や衣裳、幕等、また幕末期に我が国で初めて撮影されたとも言える銀板写真（重要文化財）さらに、繩文時代以降の埋蔵文化財等、多数の文化遺産があります。

こうした町であるだけに文化財保護審議会は有形、無形の文化財保存について大切な役割を持っていると言わなければなりません。

文化財保護審議会の主な役目は教育委員会の諮問に応じて文化財の保存活用について調査、審議し教育委員会に建議するのが主な役目であり、また有形、無形の文化財の町指定についての可否の意見をとりまとめることがあります。

今までの町指定文化財の推進の経緯は将来、北海道指定文化財に格上げされる可能性のあるものを中心に指定答申をしてきました。そして実際にもそのようになって来たものが多くあります。あわせて、町内の区域の偏りが無いように心がけて来たと思います。

当初より年に二、三回の審議会が開かれましたが、近年は年に一回開催となっています。町指定に推すような物件も少なくなりましたが、旧松前藩関係者の子孫の方々からの寄贈物件も多数にのぼっているので、よく考慮すべき時期に来ているのではないかと思っています。

## 2. 福山城（松前城）整備事業に関連して

文化財保護審議会の委員は昭和 50 年度に策定された史跡福山城保存管理計画に関連する会議にも委員として出席してきました。現在まで名称の変更や指定箇所の拡大等を含めて第三次計画まで進んでいます。

昭和の時代に比して社会状況の変化により国の予

\* 松前町文化財保護審議会 会長

算も厳しくなってますが、城跡の中に一般住宅や公共施設が建っていたことを考えると、石垣の整備や城門の建設等、進展して来ていることは大いに評価してよいのではないかと思います。

自然災害の増加にともない松前城天守閣も対震構造に問題が指摘されるようになり、天守閣の補強もしくは建て替えのことが提起され天守閣についての特別委員会も設置され「木造天守の再建が望ましい」旨の答申がされています。

この委員会にも文化財保護審議会の委員が選任されていました。

第一次保存管理計画策定の折には、町議会議員や地域代表者等の委員がおり、委員の人数も多かったのですが、その会議の折にある委員から「あなたは若いからこの計画の完成を見ることが出来るかもしれないが、私達は高齢なので無理ですね」と言われたことが今も脳裏から離れません。

確かに当時の委員は誰一人として残っていませんが、残念ながら私もその完成を見ることは出来そうにありません。

城跡の整備はこれからも相当長い年月が必要です。

この会議にも文化財保護審議会委員が参画しています。

第一次答申の時の委員が「この計画は地域の経済や観光に資するものでなければならない」旨のことを強調されていました。城跡の整備が進展しても地域が疲弊してしまっては何の意味もありません。

地方の過疎と人口減少は如何ともし難い全国的な問題ですが、こうした中にあっても少しでも地域に貢献し活性化につながる文化財保存であってほしいと願っています。

### 3. 文化財視察研修

昭和 60 年度中の昭和 61 年 2 月 24~26 日二泊三日の日程で初めての文化財視察研修が実施されました。

目的は「文化財保護行政における先進地および国指定文化財保有都市の視察研修によって本町の文化財保護行政向上に資すること」であります。視察先は函館市と青森県弘前市。函館市では公会堂、弘前市では弘前

城、長勝寺、弘前八幡宮、誓願寺。

弘前市で宿泊した「石場旅館」も文化財指定の建物でした。

冬期 2 月、雪道の悪路を高齢の委員も一緒に歩いてまわりました。

こうした視察研修は道内、道外含めて 15 年に渡り実施され、委員の見識を深めることに十分貢献したと思っています。特に東北地方で松前と深い関係を持っていた地域の研修は委員の知見を大いに深めたと考えます。

教育委員会の年度予算との関係上か、その年の年度未近くに実施されることが多く、秋田方面視察の折には急な降雪に見舞われ予定を変更して帰途についたこともあります。

平成元年度だけは 5 月 26~30 日と 4 泊 5 日でした。

偶々鹿追町で開かれた北海道文化財保護協議会総会に出席することになり、長い日程になりました。翌年にこの会の総会が松前町で予定されていたのでその準備を兼ねての視察でした。鹿追町の総会では次年度開催町の委員が議長とのことで、議長を務めましたが、お陰で今井道雄会長（丸井今井の会長）と親しくお話を出来ました。

鹿追町郷土資料館では鹿追に入植した旧家の寄贈品の中に、幕末に活躍した山岡鉄舟の書（掛軸）があり、明治時代の有力者には随分人気のあった鉄舟の書がこの地にあったことが印象に残っています。

福島県会津若松市の松平家墓地や、新潟県村上市での村上城（舞鶴城）等一つの山にあるような史跡では高齢者の委員が「下で待っているから見て来てくれ」と言わされることもありました。

今になると私自身がそうした年齢になってしましました。

平成 12 年度で視察研修は終了しましたが、視察研修の実施は委員の知識、見識を深めることに大いに役立ったと思っています。

現在はインターネットの利用等で多くの情報を得ることが可能ですが、実際にその場に立つことは、また違った経験になると思います。「百聞は一見に如かず」でその土地の空気を肌で感じることは大切なことであ

ると思います。

この研修のお陰で、私は個人で各地を訪ねた折に松前関係のものがあると、より興味をもって資料を集めたり、記録を取るようになりました。

福井県や石川県の港町での蝦夷錦、松前の殿様の掛軸や松前家紋入りの旗、滋賀県彦根市のお寺では掛け軸に使われている蝦夷錦に出会いました。

東京都内の二ヶ所にある松前家の墓地等、これからも機会と時間があれば訪ねてみたいと思っています。

福井県の永平寺に「松前津波のこと」という古文書があることを知った時には、この古文書の写真を入手し町史編集室に届けたこともあります。

近年特に古文書の研究も進み、法幢寺所蔵の古文書と永平寺に保存されている古文書がよく合致することもわかりました。

また、石川県輪島市總持寺祖院蔵から多くの古文書が発見され、江戸時代中期以降の松前との深い関係、主に経済的なつながりを知ることも出来ました。松前藩主菩提寺である法幢寺の住職であったことが、こうした多くの経験をさせてくれたものと思っています。

#### 4. 松前町指定文化財

教育委員会から町指定文化財の諮問があった場合は、その有形無形の物件についてよく調査しなければなりません。

審議会としての調査は文化財課の協力の下よく勤めて来ました。

折にふれての町内の神社、仏閣、仏像、神像、土蔵や建物の調査や研究。

国の文化庁職員の来町調査等にも同行参加させて頂きました。

町内赤神の神社棟札の指定の折には、鉛山の調査に赤神川の水源にまで登山し、永田富智文化財課長、久保泰学芸員、田村安蔵教育委員、私と当時町議会議員の阿部作松氏が頼統持参で参加しました。

また、国指定天然記念物離島大島のオオミズナギドリ繁殖地調査に国の調査官来町の折にも、離島大島、小島まで道職員、町教育委員会担当者等と一緒に参加させて頂きました。漁船での往復で船酔いのため帰つ

て来てからも身体が揺れているといった体験も思い出の一つです。

私が法幢寺住職となり約半世紀になりますが、私が松前町民になった同じ頃に永田富智氏が文化財課長になり、久保泰氏も学芸員として教育委員会に採用となっています。

両氏には随分とご教示やご指導を頂き感謝しております。

この頃同時進行的に「町史編纂事業」今も続く「歴史を生かした町づくり事業」が始まりました。またその後、文化勳章受章の金子鶴亭氏の関係で「北鷗碑林」の建設や「書のまちづくり」にも参画させて頂きました。

全て文化財保護審議会委員がそのベースになっていました。

昭和52年に任命されて以来40年以上の年月、身に余る経験をさせて頂き、また各分野に秀でた多くの人々との交流が出来ましたことに感謝しています。



# 発掘調査あれこれ

About the Archaeology in Matsumae Town

久保 泰\*

Yasushi KUBO\*

キーワード：近代、北海道松前郡松前町、発掘調査

## はじめに

このたび『松前町郷土資料館研究紀要』が刊行されるにあたり、何か一文をということであったので記憶を辿りながら、今後の参考にでもなればと思いつつ記した次第である。

縁があって松前町教育委員会に赴任したのが昭和49(1974)年だから、もう半世紀前ということになる。当時の松前町は人口19,000人余、漁業の生産高も多く随分活気にあふれた町だった。また、NHKの朝ドラの舞台になったこともあって、全国的な知名度も上がった頃だった。

この年、町教委では機構改革を行い、これまでの次長制を改めて二課制にすることとし、社会教育課には課長と課長補佐を町外から招聘するという思い切った人事だった。私の役割は、この頃、町に郷土資料館を設置する計画があり、それを担当することと、折から始まってきた緊急発掘調査に対応する専任の職員にということであった。発掘調査には多少の経験はあったものの、資料館というものは全く未知の世界で、振り返ってみると思い切った無謀な決断だったような気がする。

それまで持っていた私の緊急発掘調査に対するイメージは、調査対象地にせいぜいトレンチを何本か入れて、短期間で終了というものだった。だが、48年の高野遺跡の調査は、私にとって驚きの連続だった。大規模な全面発掘方式は、道内では函館市桔梗遺跡の調

査が始まりのようで、次いで47年と翌年春の松前町の大津遺跡であり高野遺跡であった。

当時、道内では大規模な発掘調査に対応できる体制は整っておらず、例えば大津遺跡の場合では旭川市博物館の斎藤傑氏に調査担当を依頼し、調査員・補助員には同館の職員や他館の学芸員、教員、学生の応援を仰ぎながら6,600m余の調査を終えたのである。高野遺跡では札幌医大講師峯山巖氏のもと、全道各地の中・高・高校の教員が調査員として参加した。峯山先生は元高校教員であり高文連(高等学校文化連盟)活動の郷土史研究の指導者として活動され、数々の発掘調査に携わってきた関係から、教員だけによる調査団が組まれたのである。

面積4,500m余、期間40日余りで夏休みを主とした調査であった。こうした長丁場は、私にとって初めての経験であり、参考になることばかりであった。特に、峯山先生の人生経験豊かなお話や、先輩先生方との語らいは大いに勉強になった。また、明るく純朴な作業員の人々の姿は強烈な印象として残った。翌春、松前への転勤の話には迷うことなく応諾したのである。

松前に赴任して、待ち受けていたのが郷土資料館の展示構造の策定、展示資料の収集、国道の改良工事に伴う緊急発掘調査の準備であった。郷土資料館は、新たに建設した松前町民総合センター内に設置する計画だった。50年度の開館予定であり、榎森進氏(松前町史編集室長)を中心に町の有識者をもって展示シナリ

オが纏められ、50年秋には何とかオープンに漕ぎ着けることができた。

49年度の発掘調査は、当初建石遺跡と小浜遺跡の2カ所の予定で、高野遺跡の調査に参加された先生方や学生時代の友人たちに応援を仰ぎ、夏休み期間中にメドを付ける計画であった。ところが急速もう1カ所、大尽内遺跡の調査を優先せざるを得なくなり、調査の予定が大幅に変更となってしまった。小浜遺跡の調査では、携わる者が私一人となり、経験不足の身としては心細く不安な調査であったことが今でも思い出される。

郷土資料館の開館を終え、松前町では今後大規模な調査が予想されることから、51年1月中旬から3月初めまで、奈文研の「遺物整理課程」の長期研修に参加する機会を得た。北海道からは釧路市博物館の西氏と二人で、全国から20人程の参加があり、多彩な講師陣による旧石器時代から中・近世期に至るまでの講義と実習・見学、そして参加者たちとの語らい、その後の交遊は今でも続き、大きな財産になったと思う。

この頃から北海道でも埋蔵文化財に対する認識・危機感が深まり、いわゆる行政発掘件数が大幅に増加するに及んで、渡鳥・檜山管内にも担当職員を配置する自治体が増えてきた。しかし、それでも足らず、55年から始まった白坂遺跡群の調査まで、他町村の応援や担当する機会が何度もあった。遺跡毎に当然のことながら性格や条件が異なる訳だし、各調査員の技術を学ばせてもらうには大いに参考とさせていただいた。

各地に発掘の仲間が増え、始まりは親睦と慰労を兼ねて、調査が一段落した頃、両館に集まって酒でも飲もうかということだったが、何か物足りなさをおぼえた。スライドでも持ち寄って、調査の状況と成果を発表しあい、お互いに情報を共有しようということになった。ここで発足したのが「南北海道考古学情報交換会」である。会の運営は堅苦しくなることは極力避け、開催地は各町村持ち回りとし、大勢の地元の人々の参加を期待したものであった。会の運営には当初から石本・藤田の両氏が携わり、その尽力には誠に感謝に耐えないものである。当会が若い人たちに引き継がれ、今日に至っていることは何よりのことと思う。

昭和49年以来、数々の調査に携わってきたが、振り返ってみると、未熟さと不勉強故の自責の念に耐えないことばかりである。松前町に限って、特に印象に残っているもの、今後の課題になりそうなことを記したい。

### イセバタケ貝塚と盛土遺構

イセバタケ貝塚については『松前町史』で記述したが、若干補足しておこう。地名の由来について調査の指導にあつた河野広道博士は「イセバタケという名称そのものが北海道的ではないが、イセは“伊勢のへいしはすがめなり”の伊勢で、素焼の瓶の別名である。江戸時代に道南地方の庶民が使用していた素焼きの容器がそう呼ばれていたのである。ハタケは畑で、イセバタケは“素焼きの瓶の畑”的意味」と解説している<sup>(1)</sup>。

調査の概略は町史の通りであるが、父の河野常吉氏が「根部田村伊勢畠砦址」として紹介している<sup>(2)</sup>。根部田村とは、字館浜の旧地名である。史蹟名に砦址とあるように、当時は「往古の蝦夷の穴居した砦址」と考えていたようであり、略図も示している。それによれば東西約20間、南北約49間の略長方形、底部は半円に凹み、深さは18尺、長さ30間であり、前方に土壘を設けてあったとある。由来・伝説として「往々石礫、土器類を発掘し、又は金塊等を掘出したるあり、往古蝦夷の穴居したる砦址なり」とある。

赴任以来、春まだ耕作の始まる前、町内各地の遺跡の分布を調べ始めたが、この頃は今のように畑が放置されていることもなく、低・中位の段丘はほぼ畑として耕されていた。館浜小学校裏手から湯ノ川に沿って共同墓地を越え、中位段丘の斜面一帯に夥しい量の遺物が散布しており、永田富智（のち文化財課長）が「道南最大の遺跡」と記述していたのも頷けるものだった。発掘したとみられるあたりは、周辺とは異なり広く凹んだような地形だったと記憶している。

偶然居合わせた地元の人に「ずいぶん土器が落ちてますね」と声を掛けると「昔、畠仕事をしていた時に金がでてきたんだ。それを函館から来た行商の人に頼んで現金に替えてもらったら結構な額になったんで、それを聞いた近所の人たちが我先にあたりを掘り返し、

それでこんな風になったんだ」と。河野常吉氏も、調査時にこんな話を聞いていたのではあるまいか。少し想像を加えると、10年程前に知人が知内川で16匁ほどの砂金を採集したことがある。ちょうどフィルムケースに入る大きさで、今でもこんな大きなものがあるのかと感激したものである。近世初期には、知内川の他、町内の大鶴御川、小鶴御川でも盛んに採掘された歴史があり、これらの川に石器の素材を求め、偶然拾った砂金をイセバクケに持ち込んだのかもしれない。

さて、河野氏の報告では「砦址」として松前町内でもう1カ所紹介している。「船塗砦址」がそれであり現在の静浦B遺跡とみられ、やはり広範囲に遺物が散布している。報告によれば南北約30間、東西約63間の長方形をなし、底部は半円の形状で、その深さは18尺で前方には土塁をめぐらしてあるという。

さて、この「砦址」をどのように解釈するか、近年の考古学の成果を踏まえるならば、縄文時代の「盛土遺構」と理解すべきであろう。三内丸山遺跡ばかりではなく、道内でも函館市・北斗市・福島町でも知られており、松前町では東山遺跡がこれに相当するだろう。

東山遺跡は及部川右岸の低位から高位の段丘上に立地し、細石刃から近世・明治初期に至る遺構・遺物が見られ、松前町内では最も広大な面積と豊富な内容を持っている。「盛土遺構」に係る調査地点は、高位段丘の東縁にあたる部分で、急傾斜地の治山工事による事前調査であったため少面積であったが、遺物包含層が2倍以上に及び、円筒土器下層式から上層式の各期にわたる膨大な量の遺物が出土している。松前町の場合の一般的な包含層と比べ、異常としか言いようが無く人為的な要素を考え「盛土遺構」と解釈したのである。調査地点の背後（西側）は杉林と藪になっているが、大きく凹んでいる様子が見て取れる。

「盛土遺構」の可能性のある3遺跡を紹介した。一部だけ調査はされているものの、遺跡全体からみれば極々わずかで、何時の日か全貌が明らかになることを期待しておきたい。

### 大沢遺跡とキリストバチ

盛土遺構の可能性を含みつつ、中世から近世の要素

を合わせ持ちそうな例として大沢遺跡を紹介しよう。大沢遺跡は字大沢、大沢川の右岸に沿って舌状に張り出した中位の段丘上に位置している。大沢神社脇の小径を登り、2~300mほどの地域である。

昭和61・62年に、当時松前町史編集室長であった永田富智氏の発案で、この地域が大沢キリスト教の処刑地の可能性があるのではという想定のもと、「松前町史に親しむ会」が函館カトリック教会などの協力を得て、発掘調査を行なったものである。キリスト教とは、寛永16(1639)年、砂金掘り人夫に紛れていたキリスト教徒のうち50人を千軒岳で、50人を大沢で、6人を石崎（上ノ国）で剣首したとの記録がある。いずれの場所も諸説あり不明となっている。

永田氏の聴き取り調査の結果では、大沢の名主だった佐々木家の伝承の中に、同家所有の畠の中に古井戸があり、剣首した信徒の首をその水で洗い、遺体はその近所に埋めたというものであった。調査の概要是報告書に記した通りだが、発見されたのは古井戸と縄文時代の灰跡だけであった。井戸は笏谷石の切石を組合せた立派なもので、松前でのこの石の流通経緯を考えても江戸中期以降であり、処刑年代とは合致しないと判断し処刑地は不明のままである。

この調査期間中、何度も周辺を歩く機会があったが現在とは違い、このころは、ほとんどが耕作地で周辺の状況も把握しやすかった。調査地点から台地の奥へ100mほど行ったあたりが大沢遺跡の本体部と目され、そのあたりは地元の人々によって通称「寺屋敷」と呼ばれている。正確な範囲は不明だが、目測で約北東から南西に100m弱、西北から東南にかけて50mほどが大きく皿状に凹んでいる。この凹んだ範囲全体は、縄文時代中期後半あたりを主体とする包蔵地のようである。数年前、再び現地を訪れる機会があったが、耕作放棄地となり、杉が植栽されていたが遺物はまだ拾え、一段高い東側の平坦面からは特に多く、イセバタケや東山遺跡と同様の盛土遺構を伴う遺跡ではないかと推察されるのである。

さて、福山城の背後寺町の一角、法源寺の東隣に曹洞宗寿養寺があった。同寺は明治元年の兵火によって焼失し、再建されるも、同43年に留萌管内天塩町に移

転し現在に至っている。現在では同寺の墓地のみが残っている。「御巡檢使応答申合書<sup>(3)</sup>」では「福形山寿養寺、本寺羽州秋田五丁目村ノ円通寺、永正十四年草創」とあり、別の史料には寿養寺「福形山寿養寺、本寺同法幢寺。永正十四年丁丑建立。旧記曰、永正十四年從大沢移福寿(形)山寿養寺千大館 云々<sup>(4)</sup>」とある。地名と史料から、大館に移る前の寿養寺がこの地にあった可能性も否定できない。

さらにもう一つ、本遺跡の北東側に小さな沢があるが、これを越えた緩斜面の地域が「キリシタバチ」と呼ばれている。地名の由来は分からぬが、「バチ」は「畠」の意味かもしれない。「キリシタ」とは、何とも思わせぶりな名である。かつては杉林のため、全体の様子が把握できなかったが、近年、高圧線敷設工事によって杉が伐採されたので、遠くからでもその場所がすぐ分かるようになっている。

昭和42年、田中淳氏（当時松前町職員、のち森町職員）、千代暉氏（当時遺愛高校教諭）や函館エゾ切支丹研究会の人々が、大沢川一帯でエゾキリシタン殉教の地を明らかにすべく調査をしており、その概要が道家庸熙氏によって纏められている。キリシタバチの部分について引用すると「小川と小川との間にはさまれた緩傾斜地の中央部に土堤で囲まれた略正方形に近い平坦地が認められた。南側土堤の中央部には2つの切れ目があり、東北隅にも1つの切れ目があって入口と出口を思わせた。土堤内部には杉が植栽され、発掘調査は困難視されたが、木立の間隔をぬって東南側土堤と入口と思われる付近の2カ所でトレンチ調査を行なった。東側土堤の近くでは、深さ60cmにわたって土層が攪乱されており、入口付近のトレンチ（長さ3.6m、幅30cm、深さ60cm）では、深さ20cm位の箇所から川砂・炭化物・鉛色の焼石1個が発見される…<sup>(5)</sup>」と。土堤の規模は23×23mで、ほぼ方形をなしている。土堤の高さ（現状で1m強）と内部の広さから、何らかの建物の存在を考えている。

土堤の在り方から見て、明らかに歴史時代の所産であろうが、建物があったのか、あるいは馬を囲っておいた施設とも考えられる。なお、前述の「寺屋敷」エリアに凹みの中央西側に鉤形の石積みが、「寺屋敷」の

入り口と思しき付近に、どう考へても大沢川から曳き上げたのではとみられると思わせぶりの大石がある。大沢川とその支流寺ノ沢川一帯には、砂金採掘の跡が良好に残っており、知内川流域とともに、藩政時代の産業遺産として十分な価値を有していると思う。盛土遺構の可能性のある大沢遺跡とともに、保存と将来の活用に留意してほしいものである。

### 光善寺地下道様遺構

昭和54年7月、町民から光善寺裏の畑に通じる道に穴が空いているという通報があった。この道は光善寺墓地内を縦断して、坊主沢に沿って六車宅裏手に行き、幅1m程度で、最近では畑に行く人以外は利用しない道である。だが、藩政時代には寺町から新荒町へとつながる道であった。現地に向かうと確かに道が陥没しており、古くからの道であるから井戸跡とも思えず、意外に深そうで、しかも、ある程度の広がりもありそうだった。

調査は、この年の10月から始めることとし、穴を垂直に下げるのではなく、坊主沢側から横に掘り進めるとした。その結果、この穴は垂直のもの（井戸様）ではなく、岩盤を掘りぬいた横穴らしく、道路の穴は、天盤が崩落したものと判断された。土砂を取り除き、腹這いになれば何とか中に入れそうになったころ、作業の進行を取材していた記者が、締切時間も迫っていることから中に入りたいと言い出したのである。今から考えれば随分亂暴な話である。見守っていた永田氏（文化財課長）は、私の腰に100匁の巻尺を括り付け、酸欠状態だったら困るからとローソクを持たせ、記者とともに中に入らせたのである。

入ってみると、岩盤の崩落が顕著なのは始めの箇所だけであり、5mほど進むと安定し、緑色凝灰岩の岩盤を割り貫いて（高さ180~200cm、最も高い部分で2.2m、幅0.8m程度）おり、天井部分がやや丸みを帯びた長方形の断面を呈していた。奥に向かって左側には半ば埋もれていたものの、幅約0.3m、深さ3cm程の浅い溝が続いていた。壁面にはタガネの痕が見られ、丁寧なつくりであることが分かった。穴は緩やかに傾斜しており、50m過ぎあたりから、ローム層を割り

貫いており、約 63 な進んだ地点で崩落していた。測量は役場の西村技術師にお願いし本文に示した図は、丸山恵照氏の「松前光善寺古廃庭復原」<sup>(6)</sup>に示された図を参考までに転載したものである（図 1）。

この地下道様遺構は、どうやら淨土宗光善寺の庭園あたりから、坊主沢に向かって続いているらしく、これが何の目的で造られたのか、マスコミを大いに賑わしたのである。曰く

- ◇お城の抜け穴ではないだろうか
- ◇お城の堀に水を入れる用水路ではないか
- ◇埋蔵金を埋めるために造ったのではないか
- ◇例えばキリシタンなどが秘密の礼拝場所などに使ったのではないか

等など珍説奇説が飛び交つのである。

54 年度の調査はここまでとし、次年度は崩落箇所の確認とその延長がどこまでか、さらに坊主沢との関係はどうなのか、この遺構の目的は何かを明らかにすることとし、白坂遺跡の調査も控えていたことから 4 月下旬から開始することとした。

その結果、仮の入口とした部分から坊主沢までは幅 1 なほどの溝が続いている、その内側から 5 カ所、柱穴らしきものが確認された。つまり、溝の上部には何らかの覆屋があり遺構の入（出）口を保護していたと考えられた。溝の始まりは、坊主沢の川床より現状では、約 1 な近く高いことが分かった。

庭園の背後には叶稻荷の小さな祠があるが、その背後がやや凹んだ地形となっていた。遺構の測量結果と現況とを照合すると、陥没地点はこのあたりの可能性が高いと考えられたので深いトレンチを入れることとした。結果、ついに崩落地点に達することができ、崩落の痕跡を追うと、庭園の滝組みの背後に続いているらしいことが分かった。どうやら遺構と庭園とは、何か関係がありそうだと予想されたのである。

ちょうどこの頃、松前高等学校校長丸山恵照氏は同寺副住職松浦拓雄氏とともに、庭園の復原に取り組んでいた。特に築山や滝組みの復原に力を注いでおり、作庭時に近い状態を取り戻すべく努力されていたのである。発掘をこれ以上進めると、滝組みそのものに大きな影響を与える心配もあり、ここで休止とし、遺構

の目的解明はお預けとしたのである。

さて光善寺だが、開基年代には二説あるようだ。一つは『寺社明細帳』<sup>(7)</sup>（大正 9 年）によれば「京都大本山智恩寺末 浄土宗 高徳山千島教院光善寺 天文二年草創 開山了縁和尚」とあり、「御巡檢使応答申合書」では「本寺京都百万遍智恩教寺 天正三歳草創」とあり、『福山秘府』年歴之部でも同年の記述となっている。草創当初から現在地にあったのではなく、かつては大館（徳山館）にあり、『松前家記』その他にあるように、福山館完成後の元和 5（1619）年ころ、他の寺院とともに現在地へ移転したとみられている。

何度か火災に見舞われているようだが、最近では文化 5（1808）年と天保 9（1838）年、明治 36 年の 3 度あり、明治 36 年では「二王門 山門 経藏等ヲ残スノ外堂宇ハ悉ク鳥有ニ帰ス」状態だったようだ。文化 5 年の火災の後、同 7 年 10 月に再建されている。8 年から 9 年にかけて松前に幽閉されていたゴロウニンの『日本幽囚記』<sup>(8)</sup>の中に興味深い記述がある。文化 9 年 3 月中頃から（松前奉行所より）ようやく街中とその周辺の散歩の許可が下りたようだが、露曆 4 月 23 日和暦（3 月 23 日）「火事で焼けて最近建立された墓地近くの寺社へ行く」「やがて通るべき小径を検分した」とある。ゴロウニンらは、その翌日早朝脱走したものの、翌月 4 日、木ノ子村（上ノ国町）で再び捕らえられている。ゴロウニンの見た寺院は光善寺であり、「小径」とは地下道様遺構の上の道だったかもしれない。

丸山氏の研究によれば、明治 22 年切嗣寺の権頭であった富永氏の諸記録の中に「（忍海上人は）天保十二年辛丑五年三月十四日光善寺二十四世ヲ襲ク 是ヨリ以後日夜再建事業ニ心力ヲ盡シテ本殿建立ノ功ヲ告ケ、尋テ庫裏樓内宝庫其他數個ノ建物ヲ新築シ、亦タ御盡屋ヲ新築シテ之レカ費用ヲ献上ス 藩主恩賜ヲ賜ヘリ数百ノ大石ト樹木ヲ集メ、奥殿ノ庭園ヲ築キ藩主御仏參之際殊ニ賞シ、御手許ヨリ品数ノ賞与アリ 其他門前之石垣ヲ始メ境内之敷石ニ至ルマテ一トシテ盡サザル處ナク大ニ境内之面目ヲ洗セリ…」<sup>(9)</sup>とあって、庭園の作庭年代は天保 12 年以降と考えている。

現在のところ、庭園と地下道様遺構との積極的な関係を結ぶものはないが、滝組みに向かっていることを

考慮すると、遺構と滝組みは同時期、しかもそれへの導水路としてであり、遺構のレベルと滝口のレベルの差から、サイフォンの原理を用いた可能性も否定できない。将来、庭園の本格的な整備復原があるとするならば、こうした経緯があったことを踏まえて頂ければと念じつづ記した次第である。

なお、ゴロウニンが幽閉されていた頃は、松前藩が奥州梁川へ移対されていた（文化4年から文政4年まで）時代である。

### 原口館と「原口社教」

最後に発掘調査と地域住民との関わりについて一つの例を紹介しておこう。標題の「原口社教」とは、正しくは「原口地区社会教育委員会」の略称であり、純然たる民間のグループである。

原口地区は渡島支庁管内の西端で、檜山支庁上ノ国町の小砂子地区に接する。現在でこそ道路が整備され松前の中心部から車で25分程度の距離だが、かつてはバスで片道2時間以上も要する不便な地域であり、「陸の孤島」とも呼ばれていたのである。昭和29年に三村一町（大島・小島・大沢村と松前町）が合併して新しい松前町が発足し、原口地区は旧大島村の一部として松前町に組み入れられた。

しかし、地域格差は如何ともしがたく、安易に行政に依存するだけでなく、自助努力なしにまちづくりはできないということで、昭和31年1月に「原口社教」が発足したのである。学校を活動の拠点としたものの、PTA活動とは異なり、設立の目的は「地域住民の住みよい平和な町づくりと向上発展に務め会員相互の研修及び親睦を図ること」とし、原口地区に居住する住民有志に加え、原口小中学校の校長・教頭、診療所の医師・事務長、警察官らによって組織された。地域の活性化や町おこしなどを目的とした団体・グループや活動は全国各地で見られたが、少子高齢化や過疎化の進行に伴う地域の衰退によって活動が鈍くなったり、行政への陳情や圧力が主たる目的であれば、それが達成されると解散や自然消滅することが多い。だが、「原口社教」の場合では平成18年に創立50周年を迎えるが、ここまで継続してきた理由は、様々あろうが、

何より地域の人々のまとまりと会員の絶え間ない尽力、そのつど新しい目標を設定してきたことによるものだろう。

平成に入ってからは、地域の歴史の掘り起こしと、新たな地域おこしの拠点づくりなどを目標とされたようだ。歴史の掘り起こしについては、会員である清水弘平氏が原口地区の地名や由来、伝承を様々な機会に紹介されたり、会員の校長先生方が歴史の文献などを調べられてきた。昭和63年、関尚彦氏が原口小校長として赴任され、氏の発案により平成元年「原口館を探る会」が発足したのである。地域住民の間では、館の存在は伝承として語り継がれてきていたが、次のような事実があったので紹介しておこう。

清水弘平氏の記すところでは「昭和17年5月、桧山石崎（上ノ国町）の鉱山より原口のマンガン鉱を探しに奈良さんという方がこられ、奥末沢の止めの沢の左方（上流に向かって）にサクラマンガン鉱を発見しまして、その土地に坑道を掘っている時に古銭が見つかり、その古銭は昔の塩かますに二つもありました。それを可香惟一郎さんの馬車で運んできました。そのとき、原口の方々は土の中からお金が出たということで大変な驚きようでした」<sup>(10)</sup>と紹介されている。その後、古銭は発見者らによって運び去られたようだが、ごく一部は地元住民の手元に残ったらしく、後日、市立函館博物館に寄贈されたといふ。

この話は現在でも原口地区では語り継がれしており、知っている人は多い。かつて松前地方では、道から払い下げを受け、自家消費用の薪は冬期間にグループで山に入り、決められた量だけ伐採したものであった。止めの沢とは、春先の増水時に流逝した薪を集めめた場所を指し、古銭の発見地は、旧国道の奥末川に架かっていた橋から約150mほど上流で、昭和60年ころまで水田がつくられていたあたりだといふ。

さて、ここで思い浮かぶのが昭和43年に発見された志海苔古銭の出土例である。旧戸井町では文政4（1821）年、62貫余の古銭が掘り出されたという話もあるという。道南十二館と古銭との関係を窺わせる話でもある。なお、奥末川に沿って、かつてはアイヌの人々が居住しており、そこへ「羽後秋田地方海辺ノ人

開兵ト云フ者来リ奥末ニ住居シ、蝦夷ヲ撫シ之ヲ督シテ漁業勤メシトイフ」ことがあり、寛保元（1741）年大津浪被害を受け、僅かに助かった人々が現在の原口に住み始めたと伝えられている<sup>(1)</sup>。

原口館は『新羅之記録』などの史料にあるように岡部六郎左衛門尉季澄によって築かれたとされ、河野常吉によれば第一館址と第二館址があり、その場所は現在の神山（原口市街の北側の台地）だという<sup>(2)</sup>。こうした文献や伝承・古銭の発見等から、「原口社教」の会員が中心となって、原口館に再び光をあて、先人の遺徳を顕彰するとともに、併せて地域おこしを図ろうとして結成されたのが「原口館を探る会」だった。

発掘調査の経緯・結果は報告書に記したとおりであり、残念ながら中世の館跡ではなく、東北地方北部で発見されている古代の防禦性集落に類似する、擦文時代の遺構と判断したのである。当時、この種の遺構は道内では未確認だったが、その後、乙部町小茂内遺跡や上ノ国町ワシリチャシ跡遺跡でも確認され、渡島半島南部の擦文文化期を特色づける一つとして成果を上げてきたところである。だが、調査に寄せてきた地元の人々の期待は大きかったし、それだけに落胆も大きかった。原口館はどこに、どのような形だったのか、依然として謎のままでありその解明は将来への宿題として残されているのである。

だが、「会」のエネルギーはこれで挫けることはなかった。円空や首江真澄も歩いた難所といわれた藩政時代の「小砂子山道」の再発見活動、魚付け保安林の育成活動、旧原口小の解体古材を再活用して、原口地区が一望できる掛越山の頂上に集会施設「カダヘル 21」の建設、北海道開発局や北海道もりづくりセンターを巻き込んだ「桜松街道」の整備活動へと深化していくのである。なかでも「桜松街道」の整備は国道 228 号線の両側に松前町の象徴である桜と松を、渡島の西側玄関である原口地区に植栽し、通行する人々を歓迎しようとするものだった。平成 9 年から始まり、30 年近くなった現在では木々が立派に成長し、道行く人々の目を楽しませている。

「原口館を探る会」や「桜松街道」の整備に携わった「原口社教」の主要メンバーの方々はほとんど鬼籍

に入られてしまったが、地域おこしの活動は旧原口小に設置された「交流の里づくり館」によって受け継がれている。

原口館の発掘調査は、地域住民の夢と願いによって始まり、普通の調査とは一味、二味異なる楽しいものだった。だが、当初の目的は達成できず、ある意味、空振りに終わった調査だったかもしれない。だが、結果として、別の新しいきっかけを生み出した一つの事例として紹介した次第である。

## 註

- (1) 河野広道 1958『史跡とさくら』松前町
- (2) 河野常吉 1974『北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書』復刻
- (3)『御巡檢使応答申合書』松前町史 史料編 第1巻
- (4)『福山秘府』寺院本末 卷之十三
- (5)道家庸熙 1971『蝦夷地に於ける切支丹について』私家版
- (6) 丸山恵照 1985『松前光善寺の古廃庭復原その後（一）』『北海道の文化』53号
- (7)『寺社明細帳』大正 9 年 松前町
- (8)『日本廬因記』斎藤智之訳
- (9) 富永胤介「光善寺沿革略記ニ對スル愚案」未発表資料 光善寺
- (10) 2009『半世紀の歩み 輛』原口地区社会教育委員会
- (11) 1918『函館支庁管内町村誌』

光善寺裏（古廐庭・地下道）地形図

S 200 : 1

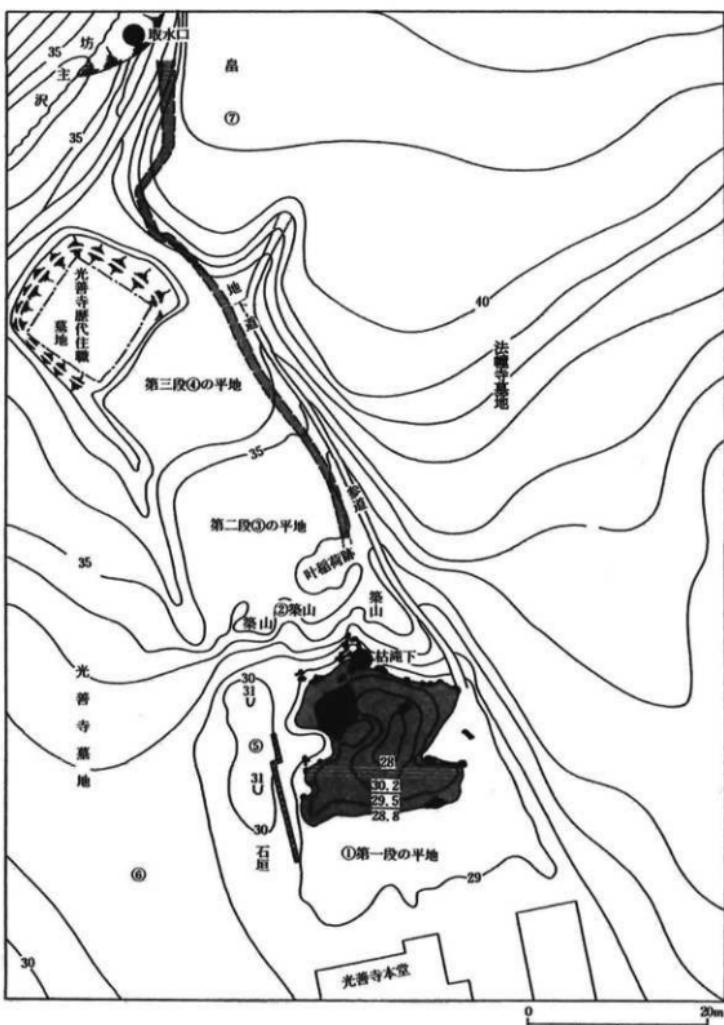


図1 光善寺裏（古廐庭・地下道）地形図

(丸山恵照 1985「松前光善寺の古廐庭復原その後（一）」『北海道の文化』53号 北海道文化財保護協会より転載)

# 聖山式土器文化圏の葬墓制

関根 達人\*

Tatsuhiro Sekine\*

- |               |       |
|---------------|-------|
| 1. 問題の所在と研究目的 | 4. 考察 |
| 2. 研究対象と研究方法  | 5. 結語 |
| 3. 事例の検討      |       |

## 要旨

北海道では縄文後期後葉から末葉にかけ、道央部を中心に道北内陸部、道東オホーツク海沿岸域で周堤墓が営まれており、その背景に後期後半の縄文社会の複雑化が指摘されている。後期末葉の御殿山式期から晚期初頭には道内各所でマウンドや配石を伴う土坑墓が出現する。晚期中葉から後葉、石狩低地帯から津軽北部・下北地方にかけてみられる聖山式土器文化圏（北部亀ヶ岡文化圏）では、粘土や砂利のマウンドを伴う土坑墓が分布している。本稿では、聖山式土器文化圏の社会像を探るため、墓域のあり方、墓の構造、供献・副葬品を検討した。

墓域は居住域から離れており、両者が隣接・重複することはほとんどないが、墓域に隣接ないし一部重なる形で、葬送儀礼に関連する配石遺構が設けられる場合がある。成人と子どもが同じ墓域に埋葬されていることや、墓域が複数に分かれている場合、それぞれに成人男女と子どもが含まれるとみられることから、墓域は世帯を単位として営まれていた可能性が高い。

聖山式土器文化圏の墓を特徴づけている粘土や砂利を用いたマウンドを伴う土坑墓は、津軽海峡に面する地域で晚期前葉に始まり、晚期中葉に増加し、聖山式文化圏内に広がったことが明らかとなった。副葬品とマウンド・桟棺・ベンガラの有無との間に特に相關性は見られないことから、マウンド・桟棺・ベンガラは被葬者の年齢・性別・階層とは関係しない可能性が高い。

聖山式土器文化圏の墓を特徴づけている副葬品に石製・土製の玉類、土製耳飾り、漆塗りの装身具、複数のサメの歯を用いた装身具など多種多様なアクセサリー類がある。これらアクセサリーの副葬に関しては、どの遺跡でも同じ墓域内で極端な差が認められる。本稿ではそのなかで特に多くの装身具を伴う乳幼児墓に注目した。乳児が身につけたとは思われない耳飾りなどが含まれていることから、それらは、子どもの親の所持品で、亡き子どものために副葬したと考えた。

聖山式土器文化圏には、豊富な装身具を持つ者と持たぬ者とがあり、持つ者はそれを子どもに継承したが、墓域や墓の構造には著しい階層差が見られない社会だったといえよう。

## キーワード

対象時代 縄文時代

対象地域 北海道・青森

研究対象 土坑墓・副葬品

\* 弘前大学 人文社会科学部 教授

## 1. 問題の所在と研究目的

2021 年、北海道・北東北の縄文遺跡群が世界文化遺産リストに記載された。構成資産 17 遺跡のうち 4 遺跡が縄文晚期の亀ヶ岡文化に属する。亀ヶ岡文化圏は北緯 38 度から 42 度付近まで南北に長く、北は北海道南部から南は福島県に及ぶ。晚期中葉には亀ヶ岡文化圏が北へ拡大した結果、大洞 C2 式新段階以降は、津軽海峡を跨いで石狩低地帯から津軽北部・下北地方にかけて聖山式土器文化圏（北部亀ヶ岡文化圏）が形成された。そして聖山式土器文化を最後に晩期末葉には本州と北海道との一体性が失われる。

亀ヶ岡文化の墓は地面に穴を掘って遺体を埋葬した土坑墓を中心とし、「共同墓地」では梢円形墓、「個別墓地」では円形墓や貯蔵穴転用墓が多く、子供用とみられる土器棺墓は拠点集落に限られることが指摘されている（金子 2005b）。そして亀ヶ岡文化圏では、北部を中心に晩期前葉から中葉にかけ、集落とは別の場所に大規模な集団墓地が営まれており、このうち青森市朝日山遺跡（青森県埋蔵文化財調査センター 1994、中嶋 2007）や秋田市地方遺跡（秋田市教育委員会 1987）などで確認されている数百基の土坑墓からなる「大規模共同墓地」は複数の集落によって営まれた可能性がある。

亀ヶ岡文化の墓は縄文時代の墓のなかでは比較的副葬品が豊富である。亀ヶ岡文化圏では副葬品を持つ墓と持たない墓の差が明確な上、副葬品を伴う子供の墓が多くみられることから、世襲制により固定化された階層化社会を想定する意見がある（中村 1999）。これに対し、筆者は、①副葬品の多くを占める玉類や耳飾り、漆塗り櫛などはいわゆる死装束を含め、死者が身に着けていたものであり、他には死者への供え物をいれたと考えられる土器や石鎚・石斧などの利器が僅かにみられるに過ぎない、②亀ヶ岡文化の墓の副葬品には、古墳に納められる石製模造品のように、初めから墓に副葬するために作られたもの（明器）は見当たらない、③古墳に副葬される玉・鏡・剣のような威信財と呼べるものも、石刀やサメの歯を用いたアクセサリーなどがごく稀にみられるに過ぎず、ヒスイ製玉類を除けば特に決まったものが存在するわけではない点

を挙げ、副葬品を伴う子供の墓を過大評価し、副葬品の多寡をもって階層化の証拠とするのは、やや性急に過ぎはしないだろうかと指摘したことがある（関根 2015）。

ところで、亀ヶ岡文化の土坑墓のなかには盛土を伴う例があることが青森県つがる市亀ヶ岡遺跡（青森県立郷土館 1984）や秋田県由利本荘市湯出野遺跡（秋田県教育庁文化課 1978）などで確認されていたが、これまで特段注目されることはなかった。しかし近年、津軽半島西海岸の十三湖北岸にある五月女窓遺跡で縄文後期後葉から晩期中葉の大規模な環状土坑墓群が発見され、多くの土坑墓に小規模な填丘（マウンド）が伴うことが判明した（五所川原市教育委員会 2017）。また亀ヶ岡遺跡でも史跡整備に伴う発掘調査でマウンドを伴う土坑墓群が環状に巡る可能性が高いことが判明した（つがる市教育委員会 2019）。五月女窓遺跡では、砂地に掘られた土坑墓の上に黄色粘土が盛られているためマウンドを容易に確認できた。加えてマウンドが遺物包含層や厚い飛砂層によって保護され良好な状態にあった。通常の遺跡では土坑墓の埋土と盛土の識別が難しいため見逃されただけで、亀ヶ岡文化期にはマウンドを伴う土坑墓はそう珍しいものではなかった可能性がある。マウンドも持つ墓は、亀ヶ岡文化のひいては縄文時代の墓地景観を考える上で重要な発見といえる。

一方、北海道では縄文後期後葉の堂林式期から末葉の御殿山式期にかけ、道央部を中心に、道北内陸部、道東オホーツク海沿岸域で、埋葬区画・墓標・顔料・副葬品などに差が見られる複数の墓からなる周堤墓が営まれた。周堤墓を対象とした研究は多く、導き出される社会像も様々だが、周堤墓が営まれた背景に、後期後半の社会の複雑化があることに関しては意見が一致している。道央部の千歳市美々 4 遺跡や恵庭市の柏木 B 遺跡では、堂林式に後続する三ツ谷式期、周堤墓と一部併存・後続して、周堤墓の要素を受け継ぐ「单独埋葬区画墓」（潮川 2007）が営まれた。そして後期末葉の御殿山式期から晩期初頭には道内各所でマウンドや配石を伴う土坑墓が出現する。そして北海道では墓制の変遷に基づき、縄文晚期から統縄文にかけ首長

者の質的変化が指摘されている（青野1999、瀬川2007、藤原2019a・2023ab）。

このように東北地方・北海道ともに縄文晚期の多様化した墓に関する関心は高く、多くの先行研究が存在するが、両地域を横断する墓制研究は意外に少ない。

松前町上川遺跡では1976年の松前町教育委員会による調査（久保1997）と2019年の弘前大学による調査（関根2021）で、縄文晚期中葉の大洞C2式古段階から聖山I・II式とそれに後続する大洞A2式併行期（大平段階）のマウンドや配石を有する土坑墓からなる墓域が確認され、マウンド上からは供獻土器、墓坑内からは玉類・石鐵・土器・漆製品などが出土した。同様の墓制は、津軽海峡沿岸部の縄文晚期中葉～後葉の聖山式土器文化圏に認められる。

冒頭で述べたように晩期末葉には本州と北海道との一体性が失われ、その後、北海道は本州と異なる歴史を歩むようになる。すなわち聖山式土器が分布する津軽海峡周辺域（道南から下北半島・津軽半島北部）は、その後、津軽平野まで北上する弥生文化圏と隣接するも、稻作を受容することなく狩猟・漁撈・採集を中心とする統縄文文化圏の南端となる。

恵山文化の母体となる聖山式土器文化の墓制はどうのように形成されたのであろうか。聖山式土器文化はどのような社会から生まれたのだろうか。そこに弥生と統縄文の社会の違いを紐解く鍵があるように思える。

本稿では、本州北部から北海道南部を範囲とする聖山式土器文化圏の墓制について、墓域のあり方、墓の構造、供獻・副葬品を検討し、墓を営んだ人々の社会について考察する。

## 2. 研究対象と研究方法

津軽海峡周辺域（松前半島・亀田半島・下北半島・津軽半島北端部）で確認されている縄文晚期の遺跡は264箇所に及ぶ（図1・表1）。このうち、北海道側では、松前町上川遺跡（19）、木古内町札苅遺跡（52）、大平遺跡（54）・大釜谷3遺跡（68）、本州側では五所川原市五月女范遺跡（253）でマウンドを伴う土坑墓が確認されている。

本稿では、聖山式土器文化圏内で晩期中葉から後葉

の集團墓地が確認されている遺跡のなかから、白老町社台1遺跡・洞爺湖町高砂貝塚、木古内町大釜谷3遺跡・札苅遺跡、五所川原市五月女范遺跡の5遺跡を選び、墓の分布、墓の構造、墓に伴う遺物について分析・検討した。このうち墓の構造に関しては、配石・マウンドなどの上部施設、墓坑の大きさ（長軸・短軸）、赤色顔料や墓坑底の溝の有無について検討した。

墓に伴う遺物については、出土位置を墓坑上、埋土中、墓坑底面に大別した。墓坑底面の遺物が、被葬者が身につけていた装身具類（死装束を含む）や副葬品であるのに対して、埋土中から出土した遺物は埋葬時に行われた葬送儀礼で用いられたものと周囲の土から混入品の両者が含まれるが、その区別は難しく、ある程度恣意的にならざるを得ない。また墓坑上の遺物には、墓が営まれた際に墓の存在を明示する目的で置かれたものと、墓に供獻されたものが含まれる。例えば土器の場合、土坑の上に敷かれた破片は墓印であり、土器は埋葬施設の一部と見做した。

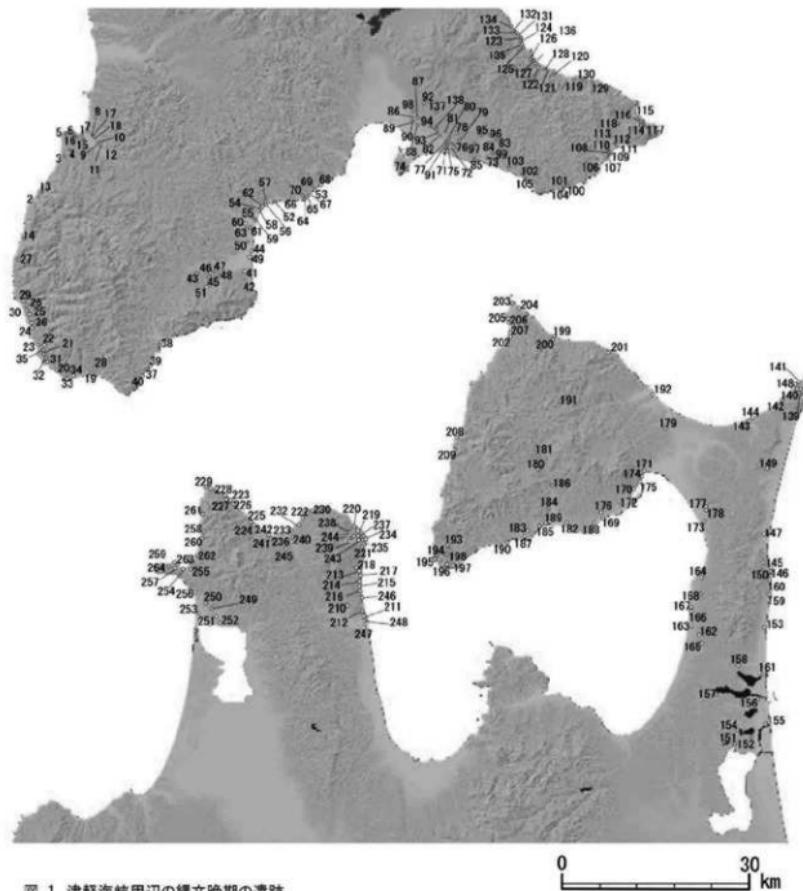


図 1 津軽海峡周辺の縄文晩期の遺跡

表1 津経海峡周辺の縄文晩期の遺跡(1)

No.	遺跡名	所在地	No.	遺跡名	所在地
1	上ノ瀬遺跡	北海道上ノ瀬町宇上ノ瀬	84	抱尾川遺跡	北海道函館市抱尾町
2	金糸沢遺跡	北海道上ノ瀬町字石崎	85	石倉貝塚	北海道函館市石倉町
3	木ノ子遺跡	北海道上ノ瀬町字木ノ子	86	西桔梗N-3遺跡	北海道函館市西桔梗町
4	大安在遺跡	北海道上ノ瀬町字小安在	87	西桔梗N-5遺跡	北海道函館市西桔梗町
5	赤石遺跡	北海道上ノ瀬町字大崎	88	西桔梗E遺跡	北海道函館市西桔梗町
6	四十九里沢A遺跡	北海道上ノ瀬町字勝山	89	西桔梗E1遺跡	北海道函館市西桔梗町
7	北村遺跡	北海道上ノ瀬町字北村	90	西桔梗E2遺跡	北海道函館市西桔梗町
8	新村1遺跡	北海道上ノ瀬町字大坂	91	吉町1遺跡	北海道函館市吉町1丁目
9	愛宕山遺跡	北海道上ノ瀬町字桂園	92	桂園1遺跡	北海道函館市桂園町
10	桂園遺跡	北海道上ノ瀬町字桂園	93	東山1遺跡	北海道函館市東山町
11	ワカビ竹遺跡	北海道上ノ瀬町字桂園	94	椿町1遺跡	北海道函館市椿町
12	岸屋遺跡	北海道上ノ瀬町字岸屋	95	柳町1遺跡	北海道函館市柳町
13	羽根森遺跡	北海道上ノ瀬町字羽根森	96	柏原1遺跡	北海道函館市柏原町
14	柏原芦地遺跡	北海道上ノ瀬町字小砂子	97	角尾1遺跡	北海道函館市角尾町
15	大丘遺跡	北海道上ノ瀬町字勝山	98	内桔梗1遺跡	北海道函館市内桔梗町
16	宮の沢遺跡	北海道上ノ瀬町字勝山	99	御前4遺跡	北海道函館市御前町
17	新川2遺跡	北海道上ノ瀬町字御前	100	浜町1遺跡	北海道函館市浜町
18	新川4遺跡	北海道上ノ瀬町字御前	101	戸井貝塚	北海道函館市浜町
19	上川遺跡	北海道松前町字上川・字朝日	102	蓬谷町1遺跡	北海道函館市蓬谷町
20	大内尽遺跡	北海道松前町字蓬浜	103	高尾敷川2遺跡	北海道函館市小安町
21	札前川2地点遺跡	北海道松前町字札前	104	桃子1・2遺跡	北海道函館市浜町
22	赤神社遺跡	北海道松前町字赤神	105	釜谷町3遺跡	北海道函館市釜谷町
23	静浦1遺跡	北海道松前町字静浦	106	川上遺跡	北海道函館市川上町
24	小島遺跡	北海道松前町字小浜	107	浜砂丘3遺跡	北海道函館市日ノ出町
25	萬野山遺跡	北海道松前町字萬野	108	高岱1遺跡	北海道函館市萬代町
26	大木遺跡	北海道松前町字大木・字江良	109	高岱4遺跡	北海道函館市萬代町
27	白坂遺跡	北海道松前町字白坂	110	日の水遺跡	北海道函館市萬代町
28	上川遺跡	北海道松前町字上川	111	古武3・3遺跡	北海道函館市日ノ出町
29	江良1遺跡	北海道松前町字江良	112	古武4・4遺跡	北海道函館市日ノ出町
30	茂田D1遺跡	北海道松前町字茂田	113	古武5・5遺跡	北海道函館市萬代町
31	1・2・3C遺跡	北海道松前町字札前	114	サルイ1遺跡	北海道函館市島泊町
32	小戸遺跡	北海道松前町字札前	115	駿華遺跡	北海道函館市新八幡町
33	建石D遺跡	北海道松前町字建石	116	大龍寺1遺跡	北海道函館市島泊町
34	大木B遺跡	北海道松前町字大木	117	サルカ2・2遺跡	北海道函館市新八幡町
35	札前第3地点遺跡	北海道松前町字札前	118	鶴林山1遺跡	北海道函館市鶴林山町
36	清都山遺跡	北海道松前町字清都	119	黒原1遺跡	北海道函館市黒原町
37	猿島遺跡	北海道福島町字猿島	120	光路1・2遺跡	北海道函館市黒原町
38	猪古遺跡	北海道福島町猪古	121	川港1遺跡	北海道函館市川港町
39	吉岡遺跡	北海道福島町字吉岡	122	ハマス野遺跡	北海道函館市川港町
40	吉野山地遺跡	北海道福島町字吉野	123	大船1遺跡	北海道函館市大船町
41	田中1遺跡	北海道函館町内字元町	124	御前M遺跡	北海道函館市御前町
42	瓦神社遺跡	北海道函館町内字元町	125	伊勢E遺跡	北海道函館市御前町
43	溝の1遺跡	北海道函館町内字溝の里	126	安浜1遺跡	北海道函館市安浜町
44	サンナシ遺跡	北海道函館町内字中の川	127	安浜B遺跡	北海道函館市安浜町
45	溝の3遺跡	北海道函館町内字溝の里	128	鶴王寺遺跡	北海道函館市川波町
46	溝の4遺跡	北海道函館町内字溝の里	129	木口1遺跡	北海道函館市木口町
47	溝の5遺跡	北海道函館町内字溝の里	130	見日1遺跡	北海道函館市見日町
48	溝の6遺跡	北海道函館町内字溝の里	131	大船遺跡	北海道函館市大船町
49	森越1遺跡	北海道函館町内字森越	132	大船2遺跡	北海道函館市大船町
50	中の1II遺跡	北海道函館町内字中の川	133	大船の1遺跡	北海道函館市大船町
51	大學遺跡	北海道函館町内字溝の里	134	大船の2遺跡	北海道函館市大船町
52	札苅遺跡	北海道函館町内字札苅	135	鶴岡遺跡	北海道函館市鶴岡町
53	谷谷遺跡	北海道函館町内字谷谷	136	精進川1遺跡	北海道函館市安浦町
54	大平遺跡	北海道函館町内字大平	137	稻田中野1・2遺跡	北海道函館市稻田中野町
55	新栄町遺跡	北海道函館町内字木古内	138	津川1遺跡	北海道函館市津川町
56	蛇内1遺跡	北海道函館町内字札苅	139	札苅貝塚	青森県下北郡東山町大字於屋子金仏間
57	蛇内3遺跡	北海道函館町内字札苅	140	札地遺跡	青森県下北郡東山町大字於屋子金仏間
58	大木2・3遺跡	北海道函館町内字木古内	141	大平1・2遺跡	青森県下北郡東山町大字於屋子八峰
59	高校高台遺跡	北海道函館町内字木古内	142	八峰遺跡	青森県下北郡東山町大字於屋子八峰
60	鶴岡1遺跡	北海道函館町内字鶴岡	143	吹切沢遺跡	青森県下北郡深浦村大字吹切牛川
61	新4・5遺跡	北海道函館町内字津川	144	野生牛チリサ遺跡	青森県下北郡深浦村大字野生牛
62	大平2・3遺跡	北海道函館町内字大平	145	14年馬遺跡	青森県下北郡南浦村大字于馬崎子年馬坂
63	建川1遺跡	北海道函館町内字建川	146	明太舟遺跡	青森県下北郡南浦村大字于馬崎子年馬坂
64	角川1遺跡	北海道函館町内字角川	147	前坂下2・2遺跡	青森県下北郡南浦村大字于馬崎子年馬坂
65	角川2・3遺跡	北海道函館町内字角川	148	ムシロ遺跡	青森県下北郡南浦村大字于馬崎子年馬坂
66	泉沢2・3遺跡	北海道函館町内字二ノ岱	149	中村1遺跡	青森県下北郡南浦村大字中村子年馬坂
67	金谷5・6遺跡	北海道函館町内字金谷	150	泊山遺跡	青森県下北郡南浦村大字泊山子年馬坂
68	大曾谷1遺跡	北海道函館町内字大曾谷	151	賀貝1遺跡	青森県下北郡南浦村大字曾谷子年馬坂
69	曾谷2・3遺跡	北海道函館町内字曾谷	152	扇坂遺跡	青森県下北郡南浦村大字曾谷子年馬坂
70	桃山1遺跡	北海道函館町内字桃山	153	石川遺跡	青森県下北郡六ヶ所村大字出宇字櫛木
71	桙本町遺跡	北海道函館町内字桙本町	154	六彦1・2遺跡	青森県下北郡六ヶ所村大字内宇半ヶ崎
72	馬丘町遺跡	北海道函館町内字馬丘町	155	市柳浜遺跡	青森県下北郡六ヶ所村大字市柳浜子年馬坂
73	豊原1遺跡	北海道函館町内字豊原町	156	篠栗貝塚	青森県下北郡六ヶ所村大字篠栗子年馬坂
74	街盤1・2B遺跡	北海道函館町内字青柳町	157	尸領1遺跡	青森県下北郡六ヶ所村大字尸領子久保ノ内
75	猿川A遺跡	北海道函館市猿川町	158	猿川D・2・2遺跡	青森県下北郡六ヶ所村大字猿川子久保ノ内
76	猿川B遺跡	北海道函館市猿川町	159	泊4遺跡	青森県下北郡六ヶ所村大字泊山子久保ノ内
77	猿川D遺跡	北海道函館市猿川町	160	泊山遺跡	青森県下北郡六ヶ所村大字泊山子久保ノ内
78	猿川E遺跡	北海道函館市猿川町	161	星較遺跡	青森県下北郡六ヶ所村大字星較子久保ノ内
79	猿川F遺跡	北海道函館市猿川町	162	磐音1・2遺跡	青森県下北郡六ヶ所村大字磐音子久保ノ内
80	猿川I・J遺跡	北海道函館市猿川町	163	明神平遺跡	青森県下北郡鶴浜町字明神平
81	東山1遺跡	北海道函館市東山町	164	桧木遺跡	青森県下北郡鶴浜町字家前川日
82	東山2遺跡	北海道函館市東山町	165	鳥糞子1遺跡	青森県下北郡鶴浜町字二又
83	女名沢遺跡	北海道函館市庵原町	166	荒内川1・1遺跡	青森県下北郡鶴浜町字上イタヤノ木

表-2 津軽海峡周辺の綱文挽跡の道路(2)

番号	路線名	所在地	番号	路線名	所在地
161	内川(2)道跡	青森県東北郡根室町字荒内	249	二ノ井道跡	青森県五所川原市相内岩井
162	柳守道跡	青森県東北郡根室町字太郎根田	250	劉井(2)道跡	青森県五所川原市相内岩井
163	舟通(1)道跡	青森県むつ市大字城ヶ字角通	251	オセウ(2)道跡	青森県五所川原市相内露草
173	津軽(2)道跡	青森県むつ市大字根室町	252	津軽(3)道跡	青森県五所川原市相内
175	大木道跡	青森県むつ市大字根室町	253	五木(2)道跡	青森県五所川原市相内
176	宇曾利川(2)道跡	青森県むつ市大字津字宇曾利川村	254	坊主(2)道跡	青森県北津軽郡由利町大字小治字坊主沢
177	足見(2)道跡	青森県むつ市大字津字竹立	255	妙山(1)道跡	青森県北津軽郡由利町大字小治妙山
178	桑道跡	青森県むつ市大字津	256	折戸(2)道跡	青森県北津軽郡由利町大字小治折戸
179	守川(2)道跡	青森県むつ市大字津	257	牛崎(2)道跡	青森県北津軽郡由利町大字小治牛崎
180	大木(2)道跡	青森県むつ市大字津	258	菅原(2)道跡	青森県北津軽郡由利町中小泊山山中
181	野村(2)道跡	青森県むつ市大字津	259	弁天鳥(2)道跡	青森県北津軽郡由利町大字津辺山小坂
182	野村(1)道跡	青森県むつ市大字津	260	舎文(2)道跡	青森県北津軽郡由利町中小泊山山中
183	野松山(1)道跡	青森県むつ市大字津面野松山	261	鶴山(2)道跡	青森県北津軽郡由利町中小泊山山中林634番延いひ山
184	勤七(2)道跡	青森県むつ市内下町小舎平	262	冬山(1)道跡	青森県北津軽郡由利町中小泊山山中607番延八八里
185	桑井(2)道跡	青森県むつ市内下町家ノ沢	263	神浦(2)道跡	青森県北津軽郡由利町津浦現境国有44635林地山小坂
186	谷沢(2)道跡	青森県むつ市内下町高野山国有林第241林地	264	阿曾(2)道跡	青森県北津軽郡由利町津浦現境国有44635林地山小坂
187	不儀無道跡	青森県むつ市内下町名越野平			
188	芦(2)道跡	青森県むつ市内下町戸戸沢			
189	糸ケ(3)道跡	青森県むつ市内下町糸ケ平			
190	大木(1)道跡	青森県むつ市内下町大木			
191	木戸(1)道跡	青森県むつ市内下町木戸			
192	木戸(3)道跡	青森県むつ市内下町木戸			
193	木戸(5)道跡	青森県むつ市内下町木戸七引			
194	木戸(6)道跡	青森県むつ市内下町木戸九軒泊			
195	木戸(7)道跡	青森県むつ市内下町木戸九軒泊			
196	山(1)上道跡	青森県むつ市内下町田ノ瀬			
197	寄道跡	青森県むつ市内下町寄			
198	寄野川(2)道跡	青森県むつ市内下町寄野川			
199	小室(2)道跡	青森県下北郡南津軽町大字島間崎字小倉			
200	筋間崎道跡	青森県下北郡南津軽町大字島間崎字筋間崎			
201	風馬(2)道跡	青森県下北郡南津軽町大字島下風馬			
202	奥戸(2)道跡	青森県下北郡南津軽町大字島下奥戸			
203	冷水(2)道跡	青森県下北郡南津軽町大字島下冷水			
204	ウマンチャ貝塚	青森県下北郡南津軽町大字島下大間平			
205	奥戸(1)道跡	青森県下北郡南津軽町大字島下奥戸上道			
206	小戸(2)道跡	青森県下北郡南津軽町大字島下小戸			
207	二ツ石(4)道跡	青森県下北郡南津軽町大字島下二ツ石			
208	沼平道跡	青森県下北郡南津軽町大字島下沼平			
209	牛津寺(2)道跡	青森県下北郡南津軽町大字島下牛津寺			
210	横千(2)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字横千			
211	井ヶ沢(2)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字井ヶ沢			
212	井ヶ沢(2)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字井ヶ沢連ヶ沢			
213	今津(1)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字今津			
214	今津(2)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字今津反			
215	今津(3)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字今津正			
216	反(4)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字反			
217	今津(2)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字今津之			
218	今津(3)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字今津之の傳			
219	石渡(1)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字石渡			
220	石渡(2)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字石渡			
221	山川(1)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字山川			
222	久慈(2)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字久慈			
223	宇賀(2)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字宇賀			
224	宇賀道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字三郎金野澤			
225	用勝道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字三郎算用勝右平野			
226	大野(2)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字三野六條間			
227	渡平道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字三野流平			
228	中平道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字三野元宇賀			
229	種田道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字三野中平			
230	月洞院道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字月洞院			
231	大崩道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字大崩			
232	山崩(1)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字山崩			
233	山崩(3)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字山崩			
234	田五郎(2)街頭道	青森県東津軽郡外ヶ浜町字田五郎西田			
235	田五郎(1)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字田五郎			
236	大川(1)崩口道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字大川崩口			
237	登名道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字登名			
238	二石道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字二石			
239	黒崎穴道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字黒崎沢			
240	田豊口道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字豊田豊口			
241	中平(2)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字中平名子中平田			
242	中平(3)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字中平名子中平田			
243	足名(中平)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字足名子中野			
244	沼名(2)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字沼名沢			
245	沼名(3)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字沼名沢			
246	大川平(2)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字大川平字村元			
247	大川平(3)道跡	青森県東津軽郡外ヶ浜町字大川平字深沢			
248	蓬松台道跡	青森県東津軽郡蓬松村大字蓬松地字山田			
249	蓬松(2)道跡	青森県東津軽郡蓬松村大字広田坂元			

### 3. 事例の検討

#### (1) 洞爺湖町高砂貝塚

はじめに多くの墓坑に人骨が伴っており、被葬者の性別・年齢が判明している高砂貝塚の墓について検討する。

胆振支庁管内西部の洞爺湖町にある高砂貝塚は、噴火湾を望む標高10m前後の台地上に位置し、2021年、南東に隣接する入江貝塚とともに世界文化遺産に登録された。高砂貝塚では1962年の予備調査、1963年の第1次調査、1965年の第2次調査により、計28基の墓坑と配石構造が確認されている（三橋ほか1987）。墓の時期は出土土器から大洞C2式古段階と考えられる。

墓坑は南東側のグループ10基（G1~6・20~22・25）と北西側のグループ18基（G7~19・23・24・26~28）に分かれ、北西側のグループは小環状列石群に隣接する（図2）。

28基全ての土坑に赤色顔料（ベンガラ）が見られ、うち16基（約57%）は配石を伴うが、マウンドが確認されているのは2基（約7%）のみである（表2）。墓坑上面から中位に壺や鉢などの土器の供獻が見られた墓は6基（約21%）、墓坑底面に土器が副葬されていた墓は6基あり、うちG10とG26ではその両者が見られた。土器が供獻・副葬された9基の墓のうち、3基は幼児、2基は小児が葬られており、子供の墓が半数以上を占めている点が注目される。

被葬者の内訳は、成人男性5名、成人女性10名、性別不明の成人1名、小児6名、幼児4名、年齢・性別不明2名で（図3）、南東側と北西側のどちらのグループにも成人男性・成人女性・小児・幼児の墓が含まれている（図2）。なおG4からは成人女性骨とともに胎児骨が見つかっており、被葬者は妊婦と見られる。

被葬者の年齢・性別と墓坑の大きさについて検討したが、成人と小児、小児と幼児、男性と女性で大きさに重複がみられ、明確な違いは見出せない（図4）。G28は直径50cmの小型の墓坑に熟年女性が座位屈葬の状態で葬られていた。もし骨が残っていないければ、墓坑の大きさから小児もしくは幼児の墓と判断された可能性が高い。墓坑の大きさから年齢や性別を推測するの

は危険であることを認識すべきである。

死者が身につけていたと考えられる装身具としては、G4の成人女性の鹿角製垂飾2点とヒスイ製勾玉1点、G12の8歳前後の男児のヒスイ製管玉1点がある。

副葬品と考えられる石器には石槍・石鏃・石斧・石匙がある。石槍は熟年男性墓（G6）、石鏃は成人男性墓（G11）に2点と熟年女性墓（G14）に1点、石斧は成人男性墓（G5）、石匙は成人女性墓（G4）に副葬されていた。他に副葬品としては、8歳前後の男児墓（G12）出土の骨針2点と成人女性墓（G19）出土の結合釣針1点がある。副葬品で注目されるのが、G10に葬られた4歳前後の幼児の腰脇に置かれていた緑色凝灰岩製小玉30点を収めた無文壺である。この墓は、マウンドと配石を伴う上、墓坑の壁に設けた張り出し部にも壺が供獻されており、高砂貝塚では最も厚葬の墓といえる。

墓域に隣接する9基の小環状列石群は立石を伴うものの（4基）と寝石のみのもの（5基）がある。前者は全て下に土坑を伴い、後者は5基中2基に土坑がみられる。小環状列石を伴う土坑6基中3基にはベンガラが伴う。小環状列石からも小型の土器や石製小玉など、墓坑と同じような遺物が発見されている。例えば立石を伴うNo.3環状列石からは、ヒスイ製丸玉と蛇紋岩製丸玉各1点と鹿骨製針状製品1点、No.9環状列石では配石下の土坑底に3点の小型壺（うち1点は内部にベンガラを充填）が置かれ、埋土中からは土偶が出土している。墓域に隣接するこれら小環状列石群は、葬送儀礼に関連した遺構であり、下部に土坑を伴うものは再葬墓の可能性を指摘したい。

以上、高砂貝塚の墓の特徴は次のようにまとめられよう。

- ・墓域は複数に分かれるが、同一墓域に成人男女・小児・幼児が葬られており、年齢や性別での墓域の使い分けはない。
- ・墓の構造や供獻・副葬品の有無に関して差がみられるが、性別や年齢との対応は見られない。
- ・マウンドを伴う、複数の土器を供獻・副葬するなど他の墓に比べ手厚く葬られた幼児や小児の墓が存在す

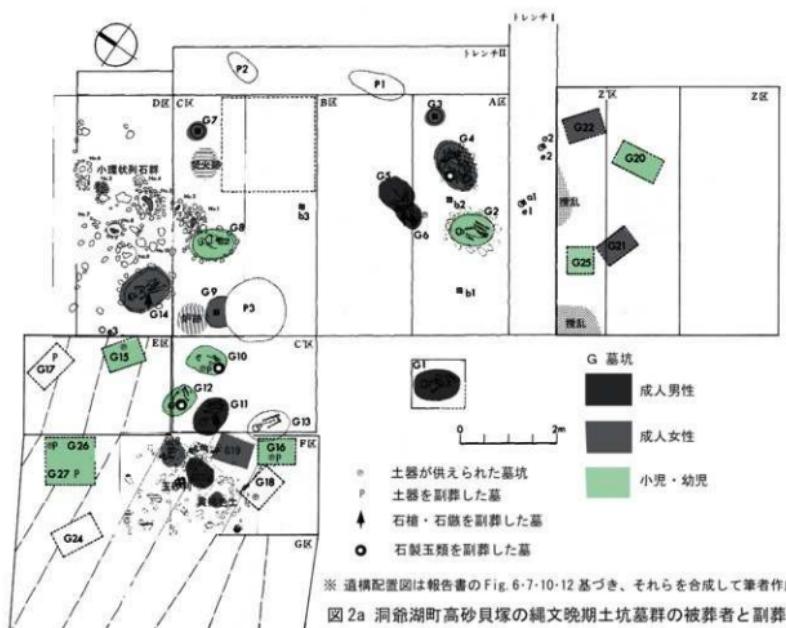


表2 洞爺湖町高砂貝塚の墓坑一覧

墓 坑	墓坑(cm)	盛 配	ペ ン	被葬者	供献・副葬土器		等 角 面	石器		石製玉		備考
					墓坑上～中位	墓坑底面		石槍	石鏡	石斧	石匙	
G1	100	65	○ ○	男性 熟年								
G2	90	65	○ ○	不明 13~14歳								
G3			○ ○	女性 熟年								
G4	110	70	○ ○	女性 成年 胎兒			2			1	1	鹿角製垂飾2 ヒスイ製勾玉1
G5			○ ○	男性 成年						3		
G6			○ ○	男性 熟年	粗製鉢1				1			
G7			○ ○	女性 成年								
G8	90	60	○ ○ ○ ○	不明 9歳前後								泡石
G9			○ ○ ○ ○	女性 熟年								
G10	80	65	○ ○ ○ ○	不明 4歳前後	粗製壺1	玉入り無文壺1					30	
G11	90	60	○ ○ ○ ○	男性 成年					2			黒曜石製石鏡2
G12	72	56	○ ○ ○ ○	男性 8歳前後				2			1	骨針2 ヒスイ製管玉1
G13	95	65	○ ○ ○ ○	女性 成年								
G14	110	75	○ ○ ○ ○	女性 熟年						1		黒曜石製石鏡1
G15			○ ○ ○ ○	不明 13~15歳	粗製壺1 豆2							
G16	60	45	○ ○ ○ ○	不明 3~4歳	粗製壺1	粗製壺1						足方墓坑外石
G17	105	55	○ ○ ○ ○	不明 成人		粗製壺1 深鉢1						
G18	100	55	○ ○ ○ ○	不明 不明	粗製壺2							
G19			○ ○ ○ ○	女性 成年					1			結合釣針先1
G20			○ ○ ○ ○	不明 10~12歳								
G21	85	60	○ ○ ○ ○	女性 成年								
G22			○ ○ ○ ○	女性 成年								
G23			○ ○ ○ ○	男性 成年								
G24	85	65	○ ○ ○ ○	不明 不明								
G25	60	45	○ ○ ○ ○	不明 1歳								ホタテ貝供獻
G26			○ ○ ○ ○	不明 小兒	小型台付深鉢1	小型台付深鉢1 無文鉢1						
G27			○ ○ ○ ○	不明 3~4歳		粗製鉢1						
G28	50	50	○ ○ ○ ○	女性 熟年			鉢3					座位屈葬

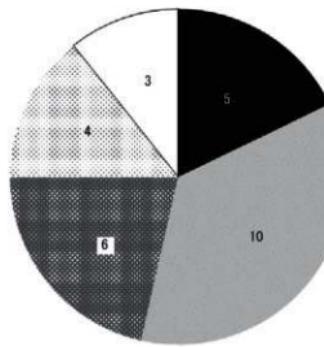


図3 高砂貝塚の被葬者の割合

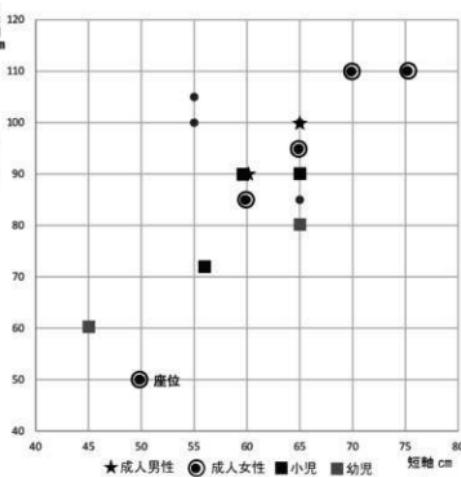


図4 高砂貝塚の墓坑の大きさと被葬者の年齢・性別

る。

- ・土坑墓群に隣接して再葬墓を含むとみられる小環状列石群が存在する。

## (2) 白老町社台1遺跡

社台1遺跡は苫小牧市と白老町の境を流れる別々川右岸の台地先端部東側の標高7~15mの傾斜地上に立地し、現在の海岸から約800m内陸に位置する。北海道縦貫自動車道建設に伴う発掘調査により、縄文晩期中葉大洞C2式古段階の堅穴住居跡1棟と72基の土坑墓が検出されている（北海道埋蔵文化財センター1981）。

土坑墓は住居跡の上方斜面の南北の尾根筋を中心にはめられており、標高10~13mの緩斜面に沿って東西に広がる土坑墓群（中央墓群）を中心に、それより上方の尾根筋に集中する土坑墓群（上方墓群）24基と、住居跡に隣接する8~10m前後の尾根筋に集中する土坑墓群（下方墓群）10基の3箇所に分かれて分布する（図5）。

粘土のマウンドをもつ土坑墓4基と砂利のマウンドを持つ土坑墓2基は全て中央墓群で見つかっている（図5a）。72基中ベンガラが確認された土坑墓は8基で、下方墓群5基、中央墓群3基と、下方墓群に偏る。一方、供獻・副葬土器や玉類・石鏃などの副葬品を持つ墓は分散しており、特定の墓群に集中することはない（図5b）。

漆器が副葬されていた19号墓と22号墓は、他の土坑墓に比べ厚葬といえる（表3）。即ち19墓には藍胎漆器1点のほか、墓坑上に7点、土坑内に1点、計8点もの土器と石鏃2点、ヒスイ製の勾玉1点、同じく白玉1点、滑石製の丸玉16点、同じく白玉1点など多数の副葬品を伴っている。一方ベンガラが敷かれた土坑底面から細い棒状の漆製品が出土した27号墓は、粘土のマウンドを伴っている。他に注目される墓坑に計110点もの玉類が出土した55号墓がある。55号墓は土坑底面にベンガラが敷かれ、滑石製の勾玉2個と100個の丸玉を連ねた首飾り、同じく足首に巻いていたと思われる滑石製の丸玉10点が連なった状態で発見されている。これら3基の墓坑は全て中央墓群に属

する。

## (3) 木古内町大釜谷3遺跡

大釜谷3遺跡はサラキ岬から北東に約4km、木古内町の北東端部に位置し、津軽海峡を望む大釜谷川左岸の標高30m前後の海岸段丘上の緩傾面に立地する。木古内町教育委員会の発掘調査により、縄文晩期中葉大洞C2式古段階の土坑墓38基が検出されている（木古内町教育委員会2003）。

土坑墓は、南側の8基（A群）と北側の30基（B群）に分かれて分布する（図6）。38基中、砂利のマウンドをもつ墓8基、土坑底面に溝や柱列を持つ墓6基、その両者が見られる墓が1基あり、それらはA・Bのどちらからも発見されている。一方で、副葬品を持つ墓はB群に限られ、A群にはない。このうち8Pと53Pからは、死者が着装していたとみられる環状塗り耳飾り2点とヒスイ製の丸玉2点が出土している。また57Pの覆土中からは生漆地にベンガラを混ぜた赤漆で入組文を描いた藍胎漆器の鉢が1点出土している。

## (4) 木古内町札苅遺跡

札苅遺跡は木古内町の中心部から東に3km、札苅駅西側の国道228号線と道南いさりび鉄道の線路に挟まれた標高8~12m前後の海岸段丘上に立地する。1971・72年に北海道開拓記念館が行った発掘調査により、縄文中期と後期末の堅穴住居跡各1棟、縄文晩期中葉～恵山式期の組石遺構1基、縄文晩期中葉大洞C2式古段階から晩期後葉の大平段階の土坑墓60基が検出されており、そのうちの57基が調査されている（北海道開拓記念館1976）。

報告書では土坑墓をI（4列より西側）・II（5列より東側）・III（15とその南側）の3ブロックに分けているが、分布状況からみてそうしたグルーピングは難しいよう思われる。大部分の土坑墓の長軸方向はN30°W～N94°Wに集中しており、遺存していた歯骨などから東頭位4基、西頭位2基と報告されている。土坑墓に重複は全く認められない。

札苅遺跡の土坑墓群に関しては、瀬川拓郎や阿部朝衛が検討を行っている。瀬川は土坑墓を東西の2グループに分けたうえで、副葬品（石鏃・石斧・玉など）

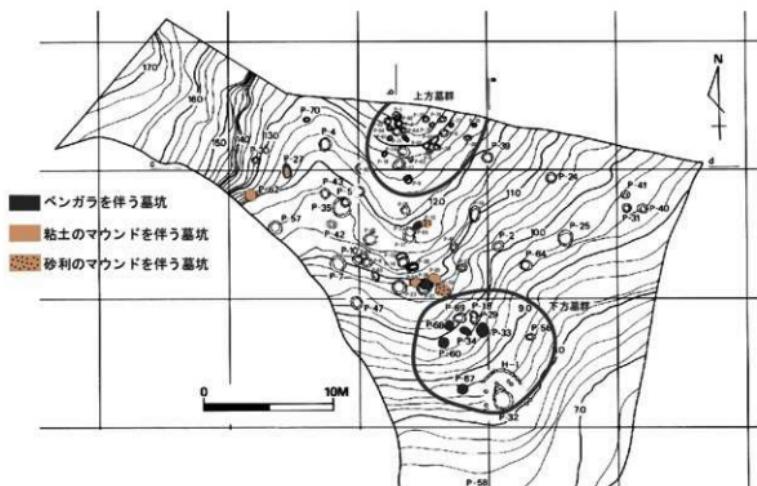


図 5a 白老町社台 1 遺跡の土坑墓群の盛土とベンガラ

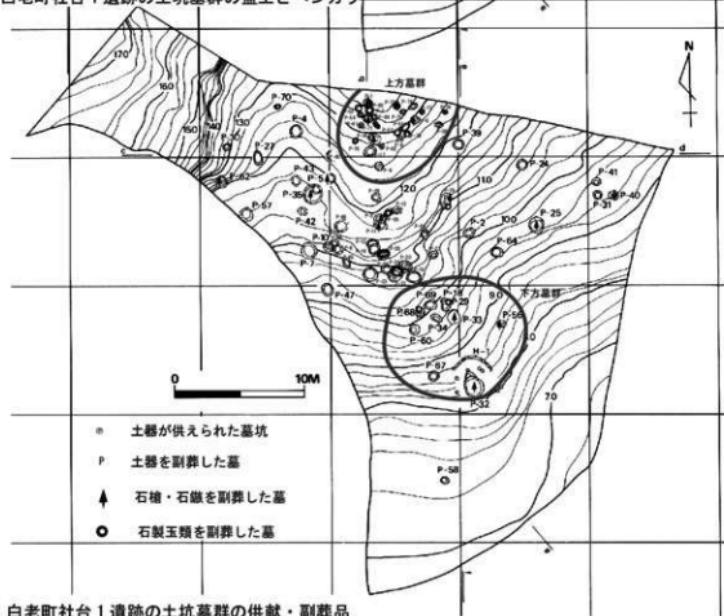


図 5b 白老町社台 1 遺跡の土坑墓群の供献・副葬品

表3 白老町社台1遺跡の墓坑一覧

番号	墓坑	墓坑(cm)	底土	ベンガラ	供獻土器		漆器	石器				石製玉	骨器										
					形態	短軸	長軸	砂利	粘土	ガラ	墓坑上・中	墓坑底面	器	石拂	石鏡	石斧	石刀	石劍	四石	楕円鏡	丸	口	勾
1 円形														1								1~80	
2 円形	107	62																				11~3	
3 円形														1									
4 円形	108	104																					
5 円形														1								35~5	
6 円形	105	66													4								
7 円形	93	67														3						66~8	
8 円形																2							
9 円形	85	77													1								
10 円形	76	70														3						10~66	
11 円形		100													1	1						3~55~11	
12 円形		65	○													1						55~12	
13 円形																						13~14	
14 円形	93																						
15 円形	108	94	○														3						
16 円形	97	76													1								
17 円形	82	72																					
18 円形															無文鉢1		1	1	1			2~29~18	
19 円形	108	82													注口玉器1・台付鉢4・粗製鉢1・赤漆塗浅鉢1	1	2	1	1		16	2~1藍胎漆器浅鉢1	
20 円形	96	76	○																			画面から炭化材	
21 円形															粗製深鉢1							36~21	
22 円形	72	59																					
23 円形	120	113																					
24 円形	78	70																					
25 円形	129	123																					
26 円形	75	53																					
27 円形	116	89	○	○											1								
28 円形	91	60													台付鉢1							44~28	
29 円形															粗製小型壺1・小型鉢1							29~18 刻片瓶	
30 円形	63	56																					
31 円形	77	73															1	1					
32 円形	182	151																					
33 円形	124	90	○												1	1	1						
34 円形	96	69	○																				
35 円形																1							
36 円形			○																				
37 円形	64	45																					
38 円形	95	75																					
39 円形	88	78													7	1		3					
40 円形	62	53															1	1					
42 円形	99	91																					
43 円形	90	75																					
44 円形	106	86																				44~28	
45 円形															1								
46 円形																							
47 円形	87	75																					
48 円形	94	74																					
49 円形	66	64																					
50 円形	58	56																					
51 円形																							
52 円形	50	49													1	1							
53 円形	64	51																					
55 円形	89	56	○																			110~255~11~12	
56 円形	50	43													深鉢1		3	1					
57 円形	115	97																					
58 円形	67	62																					
59 円形																							
60 円形	74	59	○																				
62 円形	106	98	○												粗製鉢1		1						
63 円形	52	42																					
64 円形	78	73																					
65 円形	69	60																					
66 円形	72	65																				10~66~8	
67 円形	90	77	○																				
68 円形	72	70	○												鉢1							1	
69 円形	103	76																					
70 円形	45	31																					
71 円形																	1	2		1	1	1	2
72 円形		73																1			2		1~80~72
73 円形	60	49															1						
74 円形	63	58																					
80 円形	54																					1~80~72	
83 円形																							

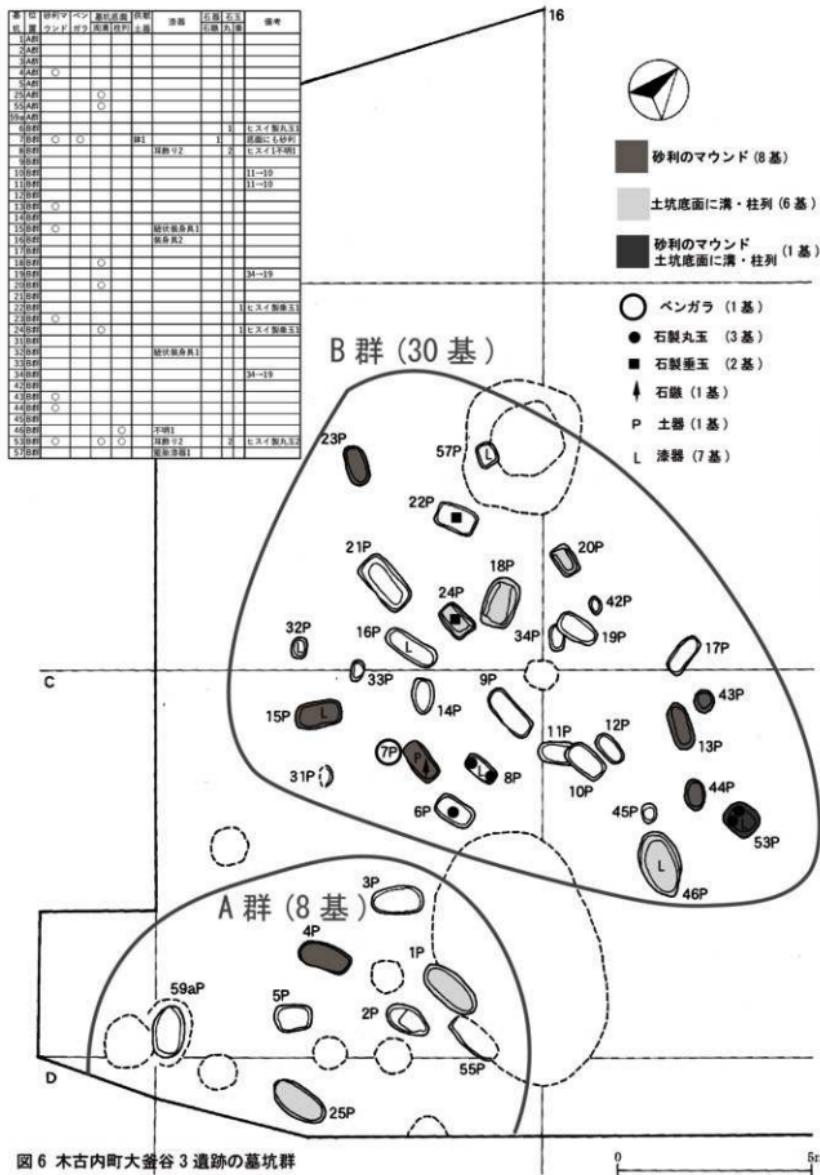


図6 木古内町大釜谷3遺跡の墓坑群

や墓坑の大きさなどから、「性差による墓域分割と幼児埋葬の女性への付随」を指摘した（瀬川 1980）。しかし土坑墓のグルーピング、副葬品による被葬者の性別の判断、墓坑の大きさによる幼児墓の抽出、ベンガラの散布状況に基づく頭位方向の推測など、いずれも恣意的な判断が目立つ。札苅遺跡から出土した石鎚を分析した阿部は、土坑墓の副葬品に「厚葬・薄葬」が見られる、石鎚が大型の土坑墓に副葬されている、土坑墓に副葬された石鎚は大型で副葬用に少人数によって製作された可能性が高いことなどを指摘している（阿部 1998）。

改めて札苅遺跡の土坑墓の構造と供献・副葬品の状況をみてみよう（表4・図7）。札苅遺跡の土坑墓の多くはマウンドを伴っており、マウンドには砂利のもの28基、粘土のもの3基、砂利と粘土の両方を用いたものの6基が確認されているが、その配置や分布に傾向性は見られない。一方、ベンガラは18基にみられ、土坑内部が未調査のもの3基を除けば、3分の1強の墓にベンガラが伴っていることになる。ベンガラを伴う墓は、墓域の中央に集中しており、縁辺部には見られない（図7上）。札苅遺跡の土坑墓は石鎚を伴う墓と石製の玉類を伴う墓に分かれ、石鎚と石製玉類の両方が見つかった墓はない。また石製の玉類を持つ墓を取り囲むように、石鎚を伴う墓が分布する（図7下）。

砂利のマウンドとベンガラに加え、赤彩された小型の鉢・壺各1点、54点の石鎚と石斧1点を伴う41号墓、砂利のマウンドとベンガラに加え、計13点もの土器が供えられていた73号墓は他の墓に比べて明らかに厚葬といえる。

### （5）五所川原市五月女窓遺跡

五月女窓遺跡は津軽平野を縦断する岩木川が日本海に注ぐ十三湖北岸の標高5～8m前後の砂丘上に立地する。発掘調査により土坑197基・掘立柱建物跡2棟・柱穴22基・土器埋設構造6基・集石構造1基・道路状遺構1条・柵列2条などの縄文時代の遺構が検出されている（五所川原市教育委員会 2017）。

土坑197基のうち、形態・構造・堆積物・出土遺物から138基が土坑墓と考えられている（表5）。土坑墓

はI～IVの4箇所の墓域に分かれて分布する（図8）。このうち中心となるのが丘陵頂部を取り囲むように環状に分布する墓域Iだが、中心部は元々土坑墓がないのか、風雨により失われたかは不明とされている。なお墓域Iの土坑墓は等高線に沿っており、特定の方向性は認められない。

土坑墓の多くは遺物包含層と重なっており、埋土には土器片などの遺物が多く混入していた。土坑墓に直接伴う土器は確認されていないため、土坑墓の時期は、埋土に含まれている最も新しい時期の土器に基づき、その時期以降に構築されたものと認定している。土坑墓は2b群土器（後期後葉）から8群（晚期後葉）に及ぶ。営まれた時期が特定できた土坑墓は92基あり、2b群（後期後葉）～3（晚期初頭：大洞B1式期）11基～4群（晚期前葉：大洞B2式期）12基～5群（晚期前葉：大洞BC式期）17基～6群（晚期中葉：大洞C1式期）24基～7群（晚期中葉：大洞C2式／聖山I式期）～8群（大洞A1式／聖山II式期）28基と、晚期中葉をピークとする。

土坑墓は後期後葉から晚期初頭にかけて、墓域Iの西側部分、すなわち標高9m前後の丘陵頂部付近から営まれ始める（図9）。続く晚期前葉の大洞B2式期には墓域Iの南側部分や墓域IIにも土坑墓が営まれるようになる。晚期前葉の大洞BC式期から中葉の大洞C1式期にも墓域IとIIが踏襲されるが、墓域Iでは北側にも土坑墓が展開するようになる。晚期中葉から後葉になると墓域Iでは土坑墓は南側に集中し、北側には新たな墓は作られなくなる。

五月女窓遺跡は、調査の途中で保存が決定したため、調査区内で確認した全ての遺構を完全に調査したわけではない。土坑墓に関しても、完掘したものの、半裁し、半分は未調査のもの、確認しただけで、掘り下げていないものが混在している。

土坑墓が営まれ始めた後期後葉～晚期初頭には約半数の土坑墓にベンガラが伴っていたが、次第にベンガラを伴う墓の割合は低下し、晚期中葉の大洞C2式／聖山I式期～晚期後葉の大洞A1式／聖山II式期には全体の約10分の1にまで減少する（図10）。

マウンドを持つ土坑墓は晚期前葉の大洞BC式期に

表4 木古内町札苅遺跡の墓坑一覧

墓 坑	マウンド(盛土)	配	ベン	供軸土器		土器片 剥削有 無印無	漆	石器			鉢 丸	石製玉 勾	備考								
				砂利	粘土	砂利+粘土	石	ガラ	墓坑上～中	墓坑底面	石鏡	石斧	石匙	石椎	擦器	石刀	曲	丸	日勾	備考	
1				○						赤彩小壺1											
2				○																	
3	○																				
5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-											上部削平
6				○							○										
7	○																				
8				○							2										
10	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	未調査	
21																					
22																					
23	○																				
25				○		○	壺1 小壺1										3	聖山I式			
27	○																	1			
30	○						錦1 小壺1				1									大洞C2式	
32				○			錦2														聖山II式
33	○																				
34	○																				1
35	○																				
36	○					○	錦1 小壺1										1	大平段階			
37				○							4										
39	○																				
40	○																				
41	○					○	赤彩小錦1 壺1			54	1								大洞C2式		
42						○					1										1
43																					
45				○																	
46	○																				
48																					
49	○																				
50																					
51																					
52	○							赤彩小壺1		○				1			5				
53	○													3							
54	○				○																
55	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	未調査	
56	○																				未調査
58	○							壺1		○	2										大洞C2式
59	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1										上部削平
60	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-											上部削平
61																					
62																					
63											1										
64	○																				
65				○																	
66	○				○																
67	○				○																
68					○		浅錦1 小壺1 台付錦1												大洞C2式		
69	○																1				
70																					
71	○																				
72	○				○												1				
73	○				○		深錦2 小型台付錦5 錦1 小型壺5		○		9									大洞C2式	
74	○				○						10										
75	○				○																
76																					
77	○				○	壺1			○		9									聖山II式	
78	○				○						1										
87					○		浅錦1 壺1		小型錦1										大洞C2式		
88							浅錦1				7									聖山II式	
89	○				○		皿1 壺1				3									大洞C2式	

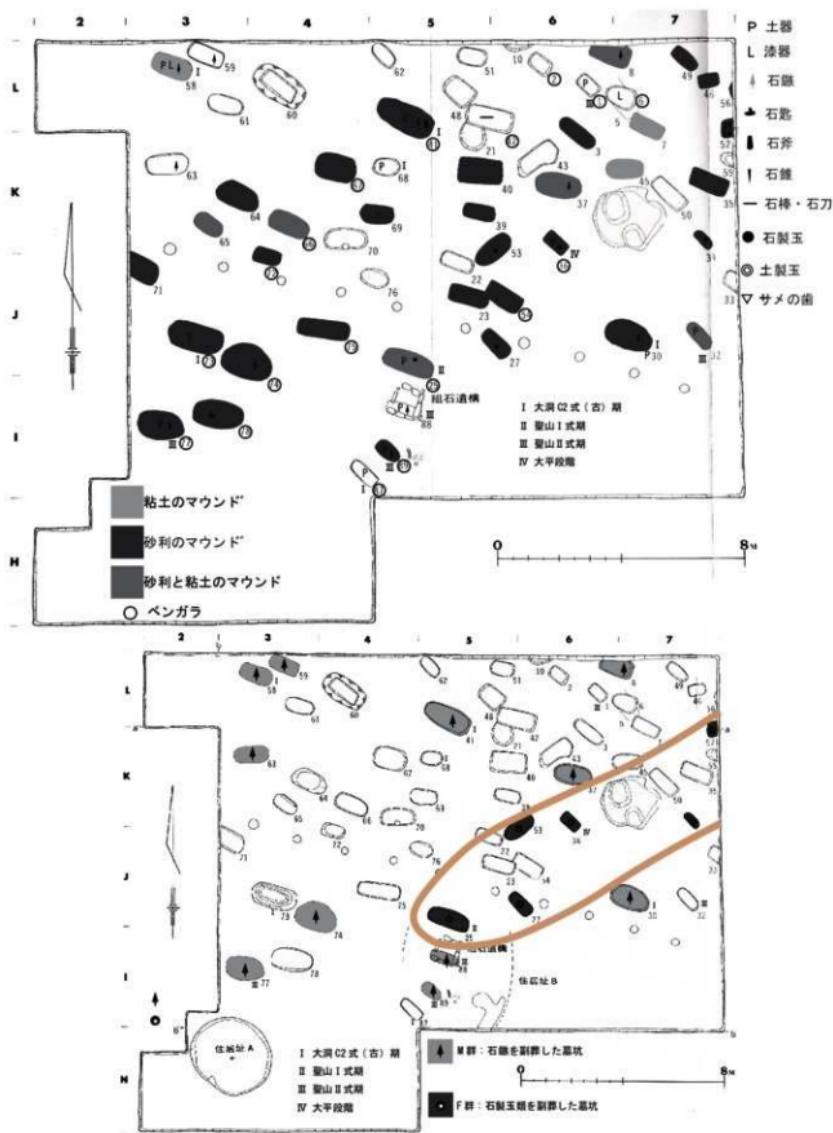


図7 木古内町札苅遺跡の墓坑群

表5 五所川原市五月女苑  
遺跡の墓坑一覧

主	時期	墓坑(cm)	被葬者	マウンド	内	ペソ	石器	土器	灰	石	玉	玉	備考
【墓坑の時期区分】													
2b群：縄文後期後葉		157 85		○									
2c群：縄文後期後葉		89 65		○									
3群：縄文晩期初頭 (大洞B1式期)		129 69		○									
4群：縄文晩期前葉 (大洞B2式期)		188 125 不明	死男	○	○	1	42	188(死男) 125(死男) 188(死男)					
5群：縄文晩期前葉 (大洞BC式期)		143 48		○	○	2							150より新しい
6群：縄文晩期中葉 (大洞C1式期)		126 48		○	○								150より新しい
7群：縄文晩期中葉 (大洞C2式/聖山I式)		179 90		○	○								150より新しい
8群：縄文晩期後葉 (聖山II式/大洞A1式)		278 170		○									160より新しい
9群：縄文後期		83 63		○									
10群：縄文後葉		157 98		○									
11群：縄文後葉		149 102		○									
12群：縄文後葉		142 83		○									152より新しい
13群：縄文後葉		140 69		○									152より新しい
14群：縄文後葉		124 44		○									150より新しい
15群：縄文後葉		179 90		○									150より新しい
16群：縄文後葉		278 170		○									160より新しい
17群：縄文後葉		83 63		○									
18群：縄文後葉		157 98		○									
19群：縄文後葉		149 102		○									
20群：縄文後葉		142 83		○									152より新しい
21群：縄文後葉		140 69		○									152より新しい
22群：縄文後葉		124 44		○									150より新しい
23群：縄文後葉		179 90		○									150より新しい
24群：縄文後葉		278 170		○									160より新しい
25群：縄文後葉		83 63		○									
26群：縄文後葉		157 98		○									
27群：縄文後葉		149 102		○									
28群：縄文後葉		142 83		○									152より新しい
29群：縄文後葉		140 69		○									152より新しい
30群：縄文後葉		124 44		○									150より新しい
31群：縄文後葉		179 90		○									150より新しい
32群：縄文後葉		278 170		○									160より新しい
33群：縄文後葉		83 63		○									
34群：縄文後葉		157 98		○									
35群：縄文後葉		149 102		○									
36群：縄文後葉		142 83		○									152より新しい
37群：縄文後葉		140 69		○									152より新しい
38群：縄文後葉		124 44		○									150より新しい
39群：縄文後葉		179 90		○									150より新しい
40群：縄文後葉		278 170		○									160より新しい
41群：縄文後葉		83 63		○									
42群：縄文後葉		157 98		○									
43群：縄文後葉		149 102		○									
44群：縄文後葉		142 83		○									152より新しい
45群：縄文後葉		140 69		○									152より新しい
46群：縄文後葉		124 44		○									150より新しい
47群：縄文後葉		179 90		○									150より新しい
48群：縄文後葉		278 170		○									160より新しい
49群：縄文後葉		83 63		○									
50群：縄文後葉		157 98		○									
51群：縄文後葉		149 102		○									
52群：縄文後葉		142 83		○									152より新しい
53群：縄文後葉		140 69		○									152より新しい
54群：縄文後葉		124 44		○									150より新しい
55群：縄文後葉		179 90		○									150より新しい
56群：縄文後葉		278 170		○									160より新しい
57群：縄文後葉		83 63		○									
58群：縄文後葉		157 98		○									
59群：縄文後葉		149 102		○									
60群：縄文後葉		142 83		○									152より新しい
61群：縄文後葉		140 69		○									152より新しい
62群：縄文後葉		124 44		○									150より新しい
63群：縄文後葉		179 90		○									150より新しい
64群：縄文後葉		278 170		○									160より新しい
65群：縄文後葉		83 63		○									
66群：縄文後葉		157 98		○									
67群：縄文後葉		149 102		○									
68群：縄文後葉		142 83		○									152より新しい
69群：縄文後葉		140 69		○									152より新しい
70群：縄文後葉		124 44		○									150より新しい
71群：縄文後葉		179 90		○									150より新しい
72群：縄文後葉		278 170		○									160より新しい
73群：縄文後葉		83 63		○									
74群：縄文後葉		157 98		○									
75群：縄文後葉		149 102		○									
76群：縄文後葉		142 83		○									152より新しい
77群：縄文後葉		140 69		○									152より新しい
78群：縄文後葉		124 44		○									150より新しい
79群：縄文後葉		179 90		○									150より新しい
80群：縄文後葉		278 170		○									160より新しい
81群：縄文後葉		83 63		○									
82群：縄文後葉		157 98		○									
83群：縄文後葉		149 102		○									
84群：縄文後葉		142 83		○									152より新しい
85群：縄文後葉		140 69		○									152より新しい
86群：縄文後葉		124 44		○									150より新しい
87群：縄文後葉		179 90		○									150より新しい
88群：縄文後葉		278 170		○									160より新しい
89群：縄文後葉		83 63		○									
90群：縄文後葉		157 98		○									
91群：縄文後葉		149 102		○									
92群：縄文後葉		142 83		○									152より新しい
93群：縄文後葉		140 69		○									152より新しい
94群：縄文後葉		124 44		○									150より新しい
95群：縄文後葉		179 90		○									150より新しい
96群：縄文後葉		278 170		○									160より新しい
97群：縄文後葉		83 63		○									
98群：縄文後葉		157 98		○									
99群：縄文後葉		149 102		○									
100群：縄文後葉		142 83		○									152より新しい
101群：縄文後葉		140 69		○									152より新しい
102群：縄文後葉		124 44		○									150より新しい
103群：縄文後葉		179 90		○									150より新しい
104群：縄文後葉		278 170		○									160より新しい
105群：縄文後葉		83 63		○									
106群：縄文後葉		157 98		○									
107群：縄文後葉		149 102		○									
108群：縄文後葉		142 83		○									152より新しい
109群：縄文後葉		140 69		○									152より新しい
110群：縄文後葉		124 44		○									150より新しい
111群：縄文後葉		179 90		○									150より新しい
112群：縄文後葉		278 170		○									160より新しい
113群：縄文後葉		83 63		○									
114群：縄文後葉		157 98		○									
115群：縄文後葉		149 102		○									
116群：縄文後葉		142 83		○									152より新しい
117群：縄文後葉		140 69		○									152より新しい
118群：縄文後葉		124 44		○									150より新しい
119群：縄文後葉		179 90		○									150より新しい
120群：縄文後葉		278 170		○									160より新しい
121群：縄文後葉		83 63		○									
122群：縄文後葉		157 98		○									
123群：縄文後葉		149 102		○									
124群：縄文後葉		142 83		○									152より新しい
125群：縄文後葉		140 69		○									152より新しい
126群：縄文後葉		124 44		○									150より新しい
127群：縄文後葉		179 90		○									150より新しい
128群：縄文後葉		278 170		○									160より新しい
129群：縄文後葉		83 63		○									
130群：縄文後葉		157 98		○									
131群：縄文後葉		149 102		○									
132群：縄文後葉		142 83		○									152より新しい
133群：縄文後葉		140 69		○									152より新しい
134群：縄文後葉		124 44		○									150より新しい
135群：縄文後葉		179 90		○									150より新しい
136群：縄文後葉		278 170		○									160より新しい
137群：縄文後葉		83 63		○									
138群：縄文後葉		157 98		○									
139群：縄文後葉		149 102		○									
140群：縄文後葉		142 83		○									

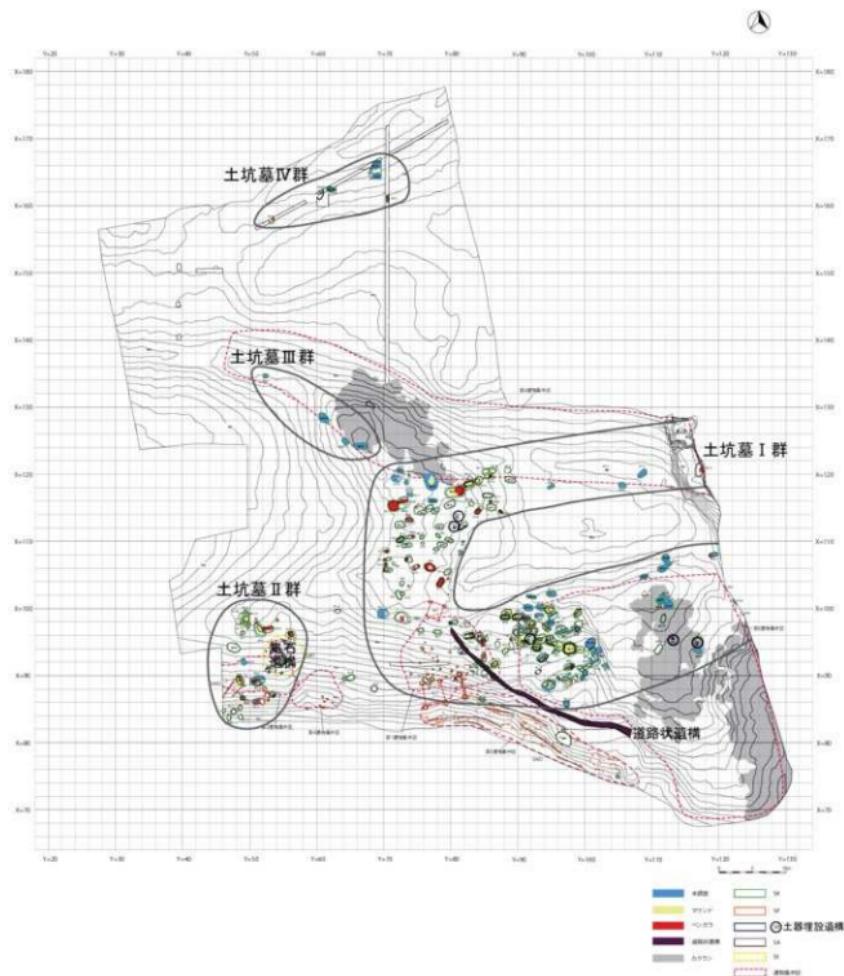


図8 五所川原市五月女苑遺跡の墓坑群

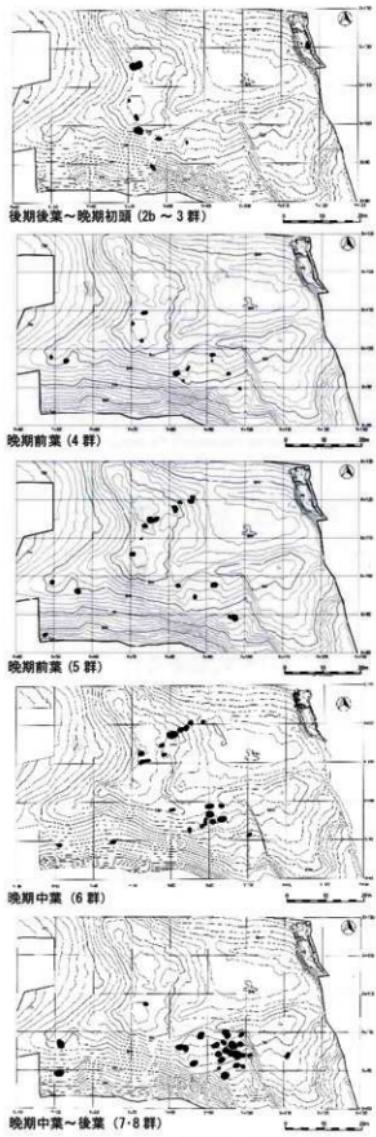


図 9 五所川原市五月女范遺跡の墓域の変遷

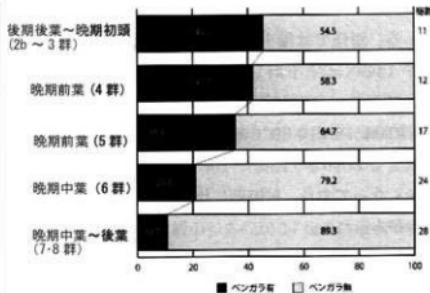


図 10 五月女范遺跡における土坑墓のベンガラの有無

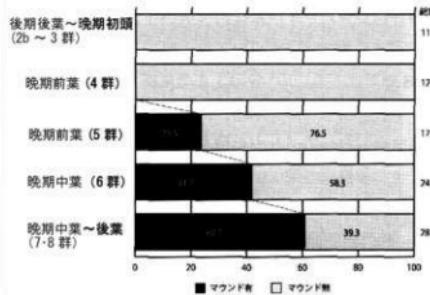


図 11 五月女范遺跡における土坑墓のマウンドの有無

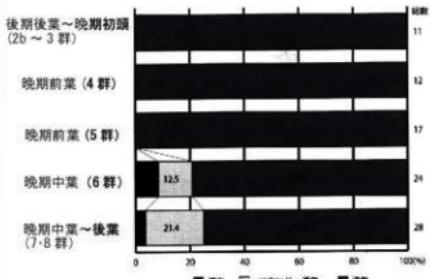


図 12 五月女范遺跡における土坑墓底面の溝の有無

図 9～12 は全て報告書から転載

現われ、時代とともに増加、晩期中葉の大洞 C2 式／聖山 I 式期～8 群晩期後葉の大洞 A1 式／聖山 II 式期には半数以上の土坑墓がマウンドを伴うようになる（図 11）。

底面に溝をもつ土坑墓はマウンドをもつ土坑墓よりもやや遅れ晩期中葉の大洞 C1 式期に現われ、晩期中葉の大洞 C2 式／聖山 I 式期～晩期後葉の大洞 A1 式／聖山 II 式期には全体の 4 分の 1 弱まで増加する（図 12）。

以上、五月女范遺跡の土坑墓は、ベンガラを伴う墓から、マウンドや土坑底面に溝を持つ墓へと変化したといえる。

次に副葬品について検討する。前述の通り、五月女范遺跡の土坑墓のなかには保存のため、遺構確認や半裁で調査が終わっているものが多く、それらについては副葬品について検討できない。ここでは他の遺構に大きく破壊されておらず、かつ底面まで完掘されている 62 基の土坑墓の副葬品について、時期毎の変遷と土坑墓の特徴の関連性について検討した。

副葬品は、装身具類に関して土製耳飾り・石製玉類・土製玉類に分け、時期がある程度特定できた 43 基を対象に変遷を検討した（図 13）。母数が少ないため安定しないが、石製玉類については後期後葉から晩期後葉まで、全体の 2~3 割程度の墓に副葬されていたと見られる。一方、土製玉類は晩期前葉の大洞 BC 式期、土製耳飾りは晩期中葉の大洞 C2 式／聖山 I 式期～晩期後葉の大洞 A1 式／聖山 II 式期に多く副葬された可能性がある。

次にベンガラ・マウンド・土坑墓底面の溝の有無と副葬品（石礫・石製玉類・土製玉類・土製耳飾り）との間に相関が見られるか検討した（図 14～16）。その結果、マウンドを持つ墓がマウンドを持たない墓に比べ、石製玉類の副葬率がやや高いものの、それ以外は、特に墓坑の構造やベンガラの有無と副葬品の保有率には関連性が見られなかった。

これら 4 か所の墓域と関連する遺構として注目されるのが、幼児用の土器棺と思われる土器埋設遺構 6 基、墓道と考えられる道路上遺構と集石遺構（SX01）である（図 8）。土器埋設遺構（SR1～6）は、全て墓域 I で

検出されている。内訳は深鉢が正立した状態で埋められていたもの 4 基（SR1～4）、深鉢が倒立した状態で埋められていたもの 1 基（SR6）、正立した鉢の上に、深鉢を逆さまに被せていたもの 1 基（SR5）である。時期は SR6 が晩期初頭の大洞 B1 式期、SR5 が晩期中葉の大洞 C2 式／聖山 I 式期、SR3 と SR4 は晩期中葉～後葉で、SR1 と SR2 は詳細な時期は不明である。これら墓域 I で検出された土器埋設遺構は墓域 I と同時期に営まれており、乳幼児用の土器棺墓と考えられる。

道路状遺構（SF01）は 1 群の南側を等高線に沿う形で、北西・南東方向に延びている。土坑墓との新旧関係から晩期前葉の大洞 BC 式期以前に作られており、墓道の可能性がある。

集石遺構（SX01）は墓域 II と一部重なっている。集石遺構は、拳大から人頭大以上の円礫・角礫をはじめ、異形礫（有孔礫・輕石・球石・くびれ石・スタンプ形礫・凹凸礫・柱状礫・バナナ状礫・棒状礫・碗状礫）、鉱物（赤鉄鉱・水晶・メノウなど）の自然石とともに、磨石・敲石類や石皿・台石類・石棒・石刀・石冠などの石器が多量に集積しており、100 点もの土偶や土器の突起部・注口部なども意図的に集めた祭祀遺構である。構築時期は晩期中葉の大洞 C2 式／聖山 I 式期～晩期後葉の大洞 A1 式／聖山 II 式期である。

#### 4. 考察

##### （1）墓域とマウンドについて

墓域は複数に分かれる場合が多いが、同一墓域に成人男女・小児・幼児が葬られており、世帯を単位とする家族が同じ墓域に埋葬された可能性が高い。また土坑墓群に接して小環状列石群（高砂貝塚）や集石遺構（五月女范遺跡）などの葬祭関連施設が伴う場合もみられる。

津軽海峡周辺では粘土や砂利のマウンドを伴う土坑墓は晩期前葉には既に見られる。管見では渡島半島では、木古内町大平遺跡（北海道埋蔵文化財センター 2017）で検出されている上ノ国式古段階（関根 2012）の砂利のマウンドを伴う 3 基の土坑墓（P=241・243・246）が最も古い。一方、前述したように津軽半島の北部に位置する五月女范遺跡でも上ノ国式古段階に併行

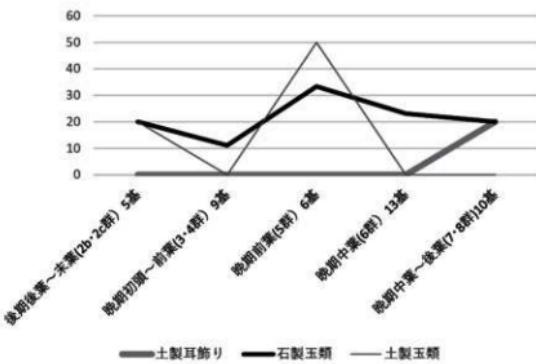


図 13 五月女范遺跡における装身具類の副葬率の変遷

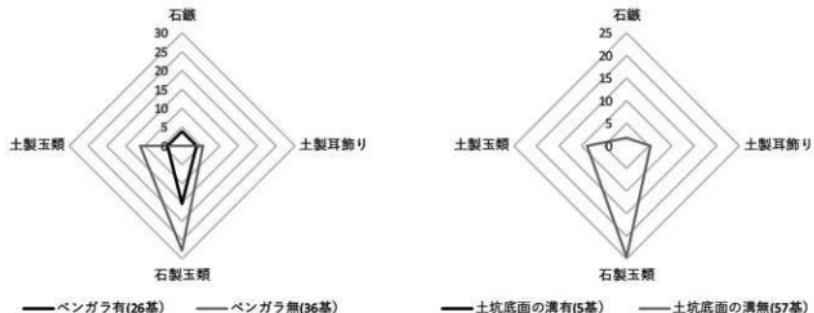


図 14 五月女范遺跡の土坑墓のベンガラの有無と副葬率 図 15 五月女范遺跡の土坑墓底面の溝の有無と副葬率

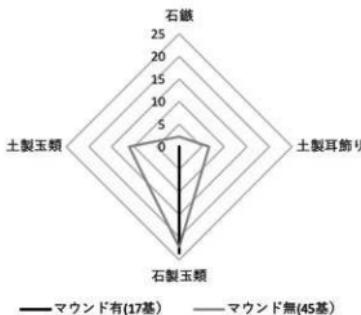


図 16 五月女范遺跡の土坑墓のマウンドの有無と副葬率

する大洞 BC 式期に粘土のマウンドを伴う土坑墓が出現し、次第に増加することが確認されている。

マウンドを伴う土坑墓の比率は、晩期中葉の大洞 C2 式古段階には黒松内低地帯より西側の高砂貝塚約 7%、社台 1 遺跡約 8%であるのに対して、渡島半島の大釜谷遺跡は約 21%と高い。また大洞 C2 式新段階／聖山 I 式、大洞 A1 式／聖山 II 式を含む五月女范遺跡では約 53%、さらに聖山 II 式に後続する大平段階を含む札苅遺跡では約 67%と、時代が下るに連れ、マウンドを伴う比率が上昇している（図 17）。このうち砂利をマウンドに用いる土坑墓は北海道側に特徴的だが、五月女范遺跡でも晩期中葉の大洞 C1 式期に 1 例だけ存在する。砂利をマウンドに用いた 162 号土坑墓の被葬者は、北海道出身であった可能性を指摘しておきたい。

以上のように、粘土や砂利を用いたマウンドを伴う土坑墓は、津軽海峡に面する地域で晩期前葉に始まり、晩期中葉に増加し、聖山式文化圏内に広がったと結論づけられよう。

## （2）土坑墓の構造・ベンガラの散布と副葬品

マウンドや土坑底面の溝は時代が新しくなるにつれ増加しており、ベンガラが撒かれる土坑墓の比率は、遺跡間の差異が大きく、いずれも副葬品との関連性はみられない。副葬品が被葬者の年齢・性別・階層に関連するのであれば、マウンドや柳棺、ベンガラの有無は、そうした被葬者の生前の属性とは直接結びつかない可能性が高い。

北海道における縄文時代の墓の副葬品については、近年、藤原秀樹が詳細な検討を行っている（藤原 2022）。藤原は道内で人骨から被葬者の性別と年齢が判明した縄文時代から統縄文時代の単墓墓 47 遺跡 168 例と合葬墓 11 遺跡 13 例を集成・検討し、縄文時代の男性は多数の石器等の狩猟具、石器製作に関する礫石器、石棒、漆塗櫛等や動物骨、女性はつまみ付ナイフ、台石・石皿等の調理に関する砾石器、両性は少數の石器、石斧等が副葬され、玉類等の装身具は、形状・材質・有無等により、性差・年齢段階差があるとした。

今回分析した聖山式土器文化圏の墓を特徴づける副葬品としては、漆塗りの装身具類や石製・土製の玉

類、複数のサメの歯をあしらった装身具類と、土坑内またはマウンド上に供献・副葬された土器、遺体のそばに置かれた籠胎漆器や多数の石器がある。このうち装身具類のほとんどは、死者が身につけていたと考えられるものが多いが、石製の玉のなかには、埋め戻した後で墓の上に撒いたと見られる例も少なくない。同様に、石器に関しては墓の上に撒いた可能性が高い事例が散見される。

石製玉類には多くの小型丸玉・白玉と少数の勾玉が見られ、それらを組み合わせた首飾りが普遍的に認められる。前述の 5 遺跡に加え、六ヶ所村上尾駿（1）遺跡 C 地区で調査された大洞 C1～C2 式期の土坑墓群 20 基（青森県教育委員会 1988）のデータを加え検討した結果、石製玉類の副葬率は北海道に比べ津軽・下北のほうが高いことが明らかとなった（図 18）。

玉類には主にヒスイと緑色凝灰岩が使われている。ヒスイが勾玉と丸玉・白玉の両方に使われているのにに対して、緑色凝灰岩は丸玉・白玉に偏る。五月女范遺跡や亀ヶ岡遺跡など津軽地方の縄文晩期の遺跡では、緑色凝灰岩製小型丸玉・白玉の製作が行われていたことを示す原石、未製品、玉砥石、穿孔用のドリルが発見されるのにに対して、北海道では製品しか見つかず、緑色凝灰岩製玉類が製作されていた可能性は低い。石製玉類の石材組成は、北海道内では遺跡間の差異が大きいのに対して、津軽と下北は近似している（図 19）。

## （3）厚葬の乳幼児・小児墓

聖山式土器文化圏内では、成人墓に比べても明らかに厚葬と呼べる小児墓が確認されている。高砂貝塚 G10 には 4 歳前後の小児が葬られていたが、土坑上にマウンド・配石・供献された粗製壺を伴い、土坑内にはベンガラが撒かれ、緑色凝灰岩製の玉 30 個が入った無文壺が副葬されていた（図 20-1）。また五月女范遺跡第 6 号土坑（SK06）には乳幼児が葬られていたが、遺体を取り囲むように多量のベンガラが撒かれ、土製耳飾り 1 点と、ヒスイ製勾玉 1 ・ヒスイ製丸玉・白玉 18 点、オノファス輝石製丸玉・白玉 9 点、滑石製白玉 1 点、蛇紋岩製丸玉・白玉 12 点、ディサイト製垂飾品 1 点が副葬されていた（図 20-2）。このうち玉類はとも

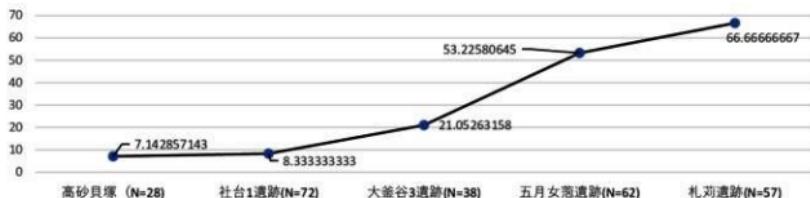


図17 マウンドを伴う墓の比率

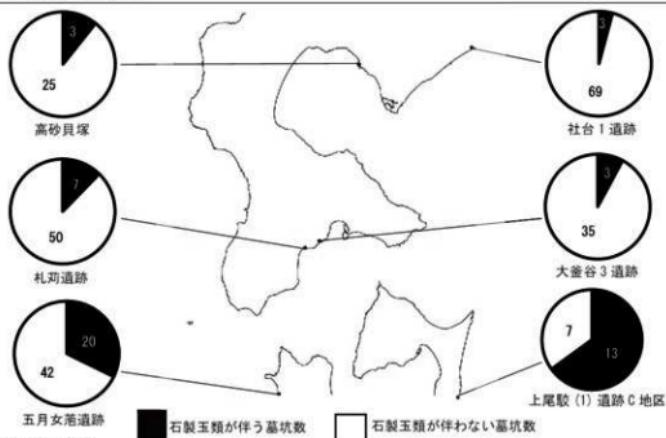


図18 石製玉類の副葬率

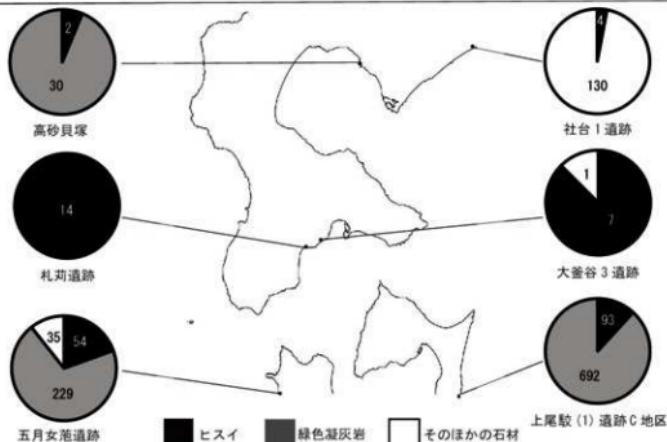
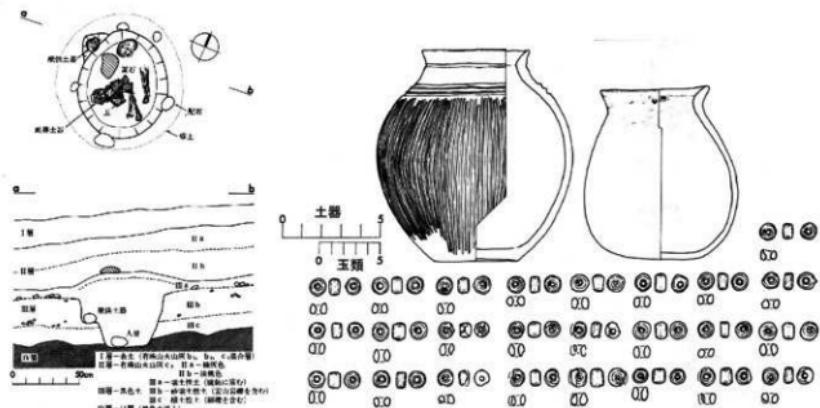
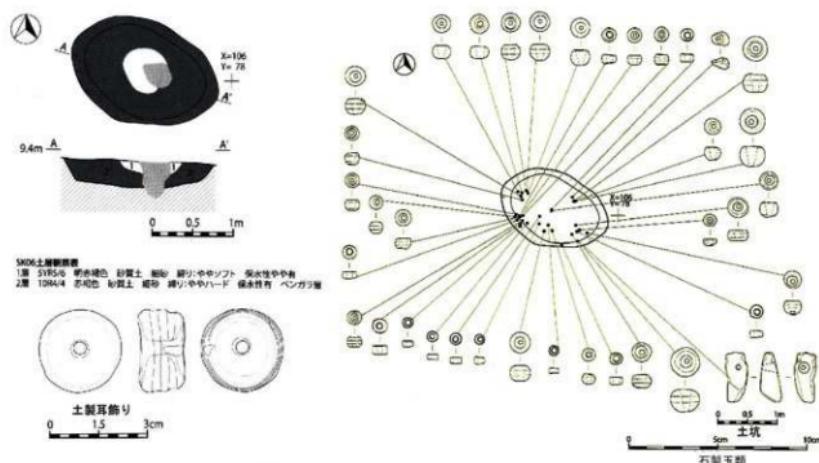


図19 副葬された石製玉類の材質



1 洞爺湖町高砂貝塚 G10 (被葬者は4歳前後の小児)



2 五所川原市五月女窓遺跡第6号土坑 (被葬者は乳幼児)

図 20 聖山式土器文化圏における厚葬の乳幼児・小児墓

かく、少なくとも直径約25mmの土製耳飾りを乳幼児が生前身につけていたとは考えられない。おそらくこれらの装身具類は、子どもの親の所持品で、亡き子どものために副葬したとみるべきであろう。同じことは緑色凝灰岩製の玉30個が入った無文壺が副葬されていた高砂貝塚G10の小児墓についてもいえるのではなかろうか。

こうした手厚く葬られた子どもは、生まれながらにして特別な地位や役割を担っていたと推定されよう。前述の通り、五月女苑遺跡では土坑墓に混じて同じ墓域内に乳幼児用の土器棺と思われる6基の埋設土器も検出されているが、いずれも副葬品は発見されていない。

なお、縄文時代の子どもの埋葬を検討した山田弘江によれば、大洞貝塚・里浜貝塚・田柄貝塚など東北地方の縄文晩期の遺跡でも、本稿で検討した聖山式土器文化圏と同じように、子どもが成人と同じ墓域に埋葬されているが、ベンガラの有無や埋葬姿勢・頭位方向などで成人と子どもが区別されていたという（山田1997）。

## 5. 結語

本稿では、聖山式土器文化圏の墓制について、墓域、墓の構造、供獻・副葬品の3つの観点から検討した。

墓域は居住域から離れており、両者が隣接・重複することはほとんどない。また高砂貝塚の小環状列石群や五月女苑遺跡の集石遺構のように、墓域に隣接しない一部重なる形で、葬送儀礼に関連する配石遺構が設けられる場合がある。成人と子どもが同じ墓域に埋葬されていることや、墓域が複数に分かれている場合、それぞれに成人男女と子どもが含まれるとみられることがから、世帯を単位として営まれていた可能性が高いと推察した。成人と子どもが同じ墓域に埋葬されるのは亀ヶ岡文化圏内に広く認められる現象である。

聖山式土器文化圏の墓を特徴づけているのが、墓坑の上に構築された砂利や粘土を用いたマウンドである。マウンドには人頭大の石や供獻された土器が伴うことも多い。粘土や砂利を用いたマウンドを伴う土坑墓は、津軽海峡に面する地域で晩期前葉に始まり、晩期中葉

に増加し、聖山式文化圏内に広がったことが明らかとなった。副葬品とマウンド・柳棺・ベンガラの有無との間に特に相関性は見られないことから、マウンド・柳棺・ベンガラは被葬者の年齢・性別・階層とは関係しない可能性が高いと判断した。

マウンドを伴う土坑墓そのものは縄文時代に広く認められるところであるが、一般には墓坑を掘削した際に出土した土や周囲の土砂を用いるため、発掘時に検出することが難しい場合が多い。聖山式土器文化圏の土坑墓のマウンドに墓坑近くの土砂ではなく、離れた場所から運んだ粘土や海岸の砂利が使われているのは、墓の多くが海岸砂丘や海岸段丘上に作られており、強い季節風の影響で土砂が吹き飛ばされ、埋葬した遺骸が露出するのを防ぐために始まり、普及していったのではないだろうか。

聖山式土器文化圏の墓を特徴づけている副葬品に石製・土製の玉類、土製耳飾り、漆塗りの装身具、複数のサメの歯を用いた装身具など多種多様なアクセサリー類がある。これらアクセサリーの副葬に関しては、どの遺跡でも同じ墓域内で極端な差が認められる。本稿ではそのなかで特に多くの装身具を伴う乳幼児墓に注目した。乳児が身につけたとは思われない耳飾りなどが含まれていることから、それらは、子どもの親の所持品で、亡き子どものために副葬したと考えた。

聖山式土器文化圏には、豊富な装身具を持つ者と持たぬ者とがあり、持つ者はそれを子どもに継承したが、墓域や墓の構造には著しい階層差が見られない社会だったといえよう。

## 引用・参考文献

- 青野友哉 1999「本州系文化の消長 大洞～惠山式土器の墓」『日本考古学協会1999年度調査大会シンポジウム 海峡と北の考古学 資料集』II 43-76
- 青森県教育委員会 1988『上尾駿(1) 遺跡C地区』青森県埋蔵文化財調査報告書113
- 青森県立郷土館 1984『亀ヶ岡石器時代遺跡』青森県立郷土館調査報告17
- 青森県埋蔵文化財調査センター 1994『朝日山遺跡3 第1分冊 朝日山(1) 遺跡 遺物編』青森県埋蔵文

- 化財調査報告書 156  
 秋田県教育庁文化課 1978『湯出野遺跡発掘調査概報』  
 秋田県文化財調査報告書 53  
 秋田市教育委員会 1987『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』  
 阿部朝衛 1998「副葬品としての石鏡—北海道木古内町札苅遺跡の石鏡を例として—」『北方の考古学』263-276 野村崇先生還暦記念論集刊行会  
 飯島義雄 1988「聖山式土器について」『亀ヶ岡式土器の編年について』第3回縄文文化検討会シンポジウム資料集  
 宇鉄遺跡調査会 1996『宇鉄遺跡』  
 上屋真一・木村英明 2016『国指定史跡カリンバ遺跡と柏木B遺跡—縄文時代後期 石棒集団から赤い漆塗り帶集団へ—』同成社  
 岡村道雄・吉岡恭平 1981『土器型式設定と聖山遺跡の土器群』『信濃』33-4 28-41  
 金子昭彦 2004「東北地方北部縄文時代晩期における副葬品の意味（予察）—階層化社会をよみとることはできるか?」『縄文時代』15 95-116 縄文時代文化研究会  
 金子昭彦 2005a「東北地方北部縄文時代晩期における墓と副葬品」『紀要』X XIV 33-56 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
 金子昭彦 2005b「階層化社会と亀ヶ岡文化の墓」『日本考古学』19 1-28  
 木古内町教育委員会 1974『札苅遺跡—国道拡幅に伴う緊急発掘調査報告書』  
 木古内町教育委員会 2003『大釜谷3遺跡』  
 久保泰 1977「北海道松前町上川遺跡における縄文晚期墳墓の調査」『考古学ジャーナル』133 14-15  
 五所川原市教育委員会 2017『五月女瀬遺跡』五所川原市埋蔵文化財調査報告書 34  
 鈴木正博 2019「津軽海峡墓景色—「亀ヶ岡文化」の北漸と再葬墓研究の真骨頂—」『利根川』41 67-86  
 佐川正敏 1981「続「聖山遺跡」I—土器の諸問題—」『北海道考古学』17 55-67  
 静内町教育委員会 1984『御殿山遺跡とその周辺における考古学的調査』
- 瀬川拓郎 1980「環状土籠」の成立と解体」「考古学研究』27 (3) 55-73  
 瀬川拓郎 2007「縄文—統繩文移行期の葬制変化」『縄文時代の考古学 9 死と弔い—葬制』208-218 同成社  
 関根達人 2012「北海道晚期縄文土器編年の再構築」『北海道考古学』48 33-52  
 関根達人 2015「亀ヶ岡文化の実像」『東北の古代史』1 177-203 吉川弘文館  
 関根達人 2021「北海道松前町上川遺跡発掘調査報告」『北海道考古学』57 85-104  
 関根達人・上條信彦編 2012『下北半島における亀ヶ岡文化の研究—む 市不備無遺跡発掘調査報告書一』弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター  
 芹沢長介編 1979『岬下聖山遺跡』東北大文学部考古学研究会  
 つがる市教育委員会 2019『史跡亀ヶ岡石器時代遺跡総括報告書』  
 中嶋友文 2007「朝日山(1)遺跡の墓群と埋葬頭位」『縄文時代の考古学 9 死と弔い—葬制』123-137 同成社  
 中村大 1999「墓制から読む縄文社会の階層化」『縄文学の世界』48-60 朝日新聞社  
 中村大 2000「土器の出土状態からみた土壙墓の認定について—縄文時代の北日本を中心として—」『國學院大學考古学資料館紀要』16 34-61  
 中村大 2007「亀ヶ岡文化の葬制」『縄文時代の考古学 9 死と弔い—葬制』81-92 同成社  
 野村崇 1985『北海道縄文時代終末期の研究』みやま書房  
 林謙作 1993「石狩低地帯南部の環状周堤墓」潮見浩先生退官記念論文集『考古論集』243-282  
 福田正宏 1998「北海道と東北地方北部における聖山式以降の土器編年」『シンボジウム聖山以後の渡島半島資料集』  
 福田正宏 2000「北部亀ヶ岡式土器としての聖山式土器」『古代』108 129-158 早稲田大学考古学会  
 福田正宏 2003「北海道における亀ヶ岡式土器と在土地器の系統」『海と考古学』5 19-52

- 藤沼邦彦・関根達人 2008 「亀ヶ岡式土器（亀ヶ岡式系土器群）」『総覧縄文土器』 682-693 アムプロモーション
- 藤本英夫 1963『GOTENYAMA Plates』 静内町教育委員会
- 藤原秀樹 2006「北海道における縄文時代後期・晚期の墓制とヒスイ玉」『玉文化』3 23-90 玉文化研究会
- 藤原秀樹 2017 「北海道の周堤墓から見た縄文時代の社会」『理論考古学の実践』II 実践編 263-295 同成社
- 藤原秀樹 2019a 「北海道における縄文・続縄文時代の子供の埋葬」『北海道考古学』55 1-20
- 藤原秀樹 2019b「周堤墓と葬送儀礼」『季刊考古学』148 74-78 雄山閣
- 藤原秀樹 2022「北海道における縄文・続縄文時代の副葬品と被葬者」『北海道考古学』58 28-44
- 藤原秀樹 2023「縄文の埋葬行為」『季刊考古学』部冊 42（北海道考古学の最前線—今世紀における進展—） 55-58 雄山閣
- 北海道開拓記念館 1976『札苅一北海道上磯郡木古内町における縄文時代晚期土坑墓の調査一』
- 北海道埋蔵文化財センター 1981『社台1遺跡・虎枝浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡』 北埋調報1
- 北海道埋蔵文化財センター 1983『ママチ遺跡』 北埋調報9
- 北海道埋蔵文化財センター 1984『湯の里遺跡群』 北埋調報18
- 北海道埋蔵文化財センター 1986『美沢川流域の遺跡群』 IX 北埋調報24
- 北海道埋蔵文化財センター 1986『木古内町札苅遺跡』 北埋調報34
- 北海道埋蔵文化財センター 1987『ママチ遺跡III』 北埋調報36
- 北海道埋蔵文化財センター 2017『木古内町 大平遺跡(4)』 北埋調報329
- 三橋公平ほか 1987『高砂貝塚』 札幌医科大学解剖学第二講座
- 南北海道考古学情報交換会第20回記念シンポジウム実行委員会 1999『北日本における縄文時代の墓制資料集』
- 山田康弘 1997「縄文時代の子供の埋葬」『日本考古学』4 1-39
- 吉崎昌一編 1979『聖山—北海道亀田郡七飯町における縄文時代遺跡の調査一』
- 【関根達人、連絡先：弘前大学人文社会科学部・弘前市文京町1】



# 文化財火災時の情報伝達

## —松前奉行所跡・福山城（松前城）天守焼失の顛末—

Information Transmission in the Event of a Cultural Property Fire

—The Story of the Matsumae Magistrate's Office and Fukuyama Castle (Matsumae Castle) Castle Tower Burnt Down—

佐藤 雄生\*

Yuuki SATO\*

- |                 |               |
|-----------------|---------------|
| 1. はじめに         | 4. 公文書にみる情報伝達 |
| 2. 国宝の指定と修理への動き | 5. おわりに       |
| 3. 松前奉行所跡と天守の焼失 |               |

### 要旨

福山城の（通称：松前城）天守は昭和24年6月5日に発生した役場火災の飛火で類焼・焼失し、10年後の昭和34年には復興天守の建設工事が始まった。昭和35年には鉄筋コンクリート製の躯体が完成、翌年の付帯工事を経て松前城資料館として開館して現在に至る。

従来、天守の焼失については、躯体が炎上する様を目の当たりにした人々からの聞き取りや新聞記事をもとに松前町史の中で説明されてきたが、行政側の動向にはあまり触れられてこなかった。本稿では、天守焼失に係る文書類すなわち松前町・北海道教育委員会・文部省の三者間のやり取りに係る電報や行政文書をもとに、天守焼失に係る行政機關同士の情報共有や連絡調整の実態をたどった。

文部省・北海道教育委員会に対する文化財火災の第一報は電報によるもので、天守焼失から20分ほど経過した午前4時42分付けで発信されていた。以後、行政機関同士の指示連絡事項については電報が利用されていることが明らかとなった。国に対する速報の時点では役場庁舎となっていた史蹟松前奉行所跡の焼失については触れられておらず、その報告がなされたのは、火災から3日後の6月8日付けのことであった。

当時の郵便は発送から配達まで松前一札幌間で3~4日、松前一東京間で3~14日の時間を要しているため、即時性の高い電報が有用であったと考えられる。

### キーワード

対象時代 昭和

対象地域 北海道松前郡松前町

研究対象 松前奉行所跡、福山城（松前城）天守、情報伝達

## 1.はじめに

松前町のシンボルとなっている史跡松前氏城跡福山城跡（通称：松前城）は、前身となる福山館を改修して安政元年（1854）に完成した松前氏の居城であり、本丸に天守を有する本道唯一の日本式城郭である（図1・2、写真1）。

この天守について、縄張り図等では三重御櫓という表記となっているが、本稿では国宝保存法のもとで国宝指定となった際の名称「福山城（松前城）天守」にしたがい、安政元年（1854）竣工時のものを「天守」、昭和24年の焼失後に鉄筋コンクリート製で建設されたものを「復興天守」と呼び区別する。また、本稿でいう国宝とは国宝保存法で規定されたものをしており、現行の文化財保護法に規定される国宝ではないことをお断りしておく。

さて、天守は昭和24年6月5日に発生した役場火災の飛火で類焼・焼失し、10年後の昭和34年には復興天守の建設工事が始まった。昭和35年には鉄筋コンクリート製の躯体が完成、翌年の付帯工事を経て松前城資料館として開館して現在に至る（写真2）。

従来、天守の焼失については、躯体が炎上する様を目の当たりにした人々からの聞き取りや新聞記事をもとに松前町史の中で説明されてきた。

一方で、行政側の動向にはあまり触れられず、役場・病院の再建や戸籍簿の再製、天守復興への動きばかりが取り上げられている（松前町1993）。昭和43年4月1日から着手された町史編集の段階では天守焼失の実体験がまだ身近にあったためか、その動向を知る文書類は注目されていなかったのであろう。

令和4年、筆者は松前町教育委員会事務局が置かれている松前町民総合センターの書庫資料室において、天守焼失に係る文書類が綴られた簿冊を確認した（写真3）。そこには松前町・北海道教育委員会・文部省の三者間のやり取りに係る電報や行政文書が綴られており、既刊の松前町史には反映されていない情報、すなわち行政側の動向を知ることができるものであった。

本稿では、これまで語ってきた天守焼失の顛末を踏まえ、簿冊に含まれる内容から当時の行政機關同士の情報共有や連絡調整の実態をたどる。

## 2. 国宝の指定と修理への動き

まず、松前町史を参考に福山城天守が国宝となった経緯と、戦後の修理に向けた動きをふり返る。

いわゆる存城廃城令により、福山城は明治8年（1875）までに石垣が解体され、外堀・内堀が埋められるなどして破却された。ただし、天守と本丸御門、本丸表御殿の一部は残置されることになった。

明治21年（1888）には天守を福山町（後の松前町）の町内会所として利用するために修理がなされ、大正7年（1918）の暴風雨では天守の一部が破損、同12年には天守の鰐の取替えが行われた。

昭和10年（1935）、福山城は国の史蹟に指定、同12年に至って文部省国宝調査員が来町した。これを機に、当時の北海道長官であった池田清を代表とする福山城保存会が結成され、福山城（現存する天守・本丸御門・本丸御門東堀）の国宝指定に向けた運動が始まった。

昭和15年（1940）3月に国宝指定申請がなされた後、天守の応急修理が行われ、翌昭和16年3月12日付けで福山城（松前城）天守、本丸御門、本丸御門東堀が国宝に指定されている。

ところが太平洋戦争に入ると、白亜の天守は艦砲射撃・空襲の目標となりうるとの危惧から、軍の指示により擬装することとなった。ヨモギの葉で煮詰めた藁繩を天守各層の外壁に掛けたのである（写真4）。終戦後、擬装網が取り外されたが、水分を含んだ繩が接触したことでの漆喰が剥落し、化粧棟の鰐も落下するというありさまであった（写真5）。

昭和22年（1947）、文部省から高端・真田両技官が来町。翌年には国立博物館の国宝保存修理課長であり福山城の修理を統括する大岡實氏も来町して打合せを行い、昭和24年から解体修理に入る見込みとなつた。

## 3. 松前奉行所跡と天守の焼失

引き続き松前町史から、天守焼失までの経緯をみてみよう。昭和24年（1949）6月4日には天守前の空閑地（通称：観潮台）に作業小屋が組まれ、翌日には修理のための足場が組まれるところまできた矢先、火災は起きた。6月5日の午前1時15分ころ、天守が立つ福山台地の東側、大松前川沿いに位置する松前町役

場において火災が発生した。役場当直員が電灯の笠に遮光幕を被せたことで熱を持ち、発火に至ったとされる。この庁舎は旧松前奉行所を利用したもので、史蹟名勝天然記念物保存法に基づき昭和9年に史蹟松前奉行跡に指定されていた。

役場庁舎での火災が起きてから約30分後、午前1時45分ころに天守の化粧棟木上の西側にあるホゾ（鯫の脱落跡）に火の粉が落ち、さらに30分後には本格的に最上階が燃え出した（写真6）。

この年は4月末からほとんど雨が降らず、当時貯水槽として利用されていた本丸の内堀跡も空になっていた。松前・大島・福島の各消防団の自動車ポンプにより海水を汲み上げて天守に噴射する手法をとったが、一階を満らす程度であったという（松前町1993）。

天守は3層から順に下へと焼け落ち、午前4時25分ころに全焼、一連の火災はおよそ3時間で鎮静化した（写真7・8）。国宝指定となっていた本丸御門東塀は修理のため天守内に解体・保管されていたが、天守とともに焼失している。

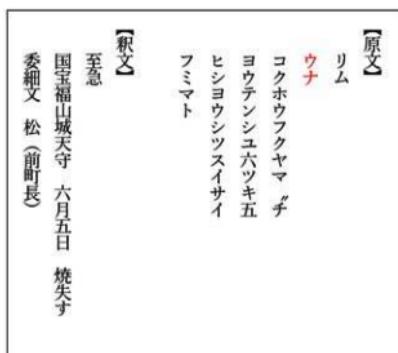
なお、この時、火災現場に集まった町民たちは、半数が本丸御門と松城小学校（旧本丸表御殿）の屋根に上り、残る半数が井戸戸を汲んで綱で吊り上げ、屋根にかけて類焼を防いでいる。

#### 4. 公文書にみる情報伝達

ここからは、公文書をもとにして行政機關同士の情報伝達について整理する。先に述べた天守焼失に係る文書類が綴られた簿冊は、その表紙に『國宝福山城史蹟松前奉行所跡焼失関係』（以下、『焼失関係文書』とする）である。焼失関係文書はB5版で、松前奉行所跡や天守焼失の連絡、本丸御門の修理や天守復興に係る設計、申請書等の控えが含まれていた。

時系列に従って文書を取り上げてみよう。

まず天守焼失の第一報を告げる電報の頼信紙とその稿文である（写真9）。天守焼失から20分ほど経過した午前4時42分付で、松前町長であった佐々木豊から北海道教育委員会教育長에게発信されており、緊急性と重要性に鑑みて端的に天守が焼失したことが記され、委細は文書にて送るとしている。



そして半日以上が経過した午後6時52分、佐々木町長は文部大臣高潮土太郎と国立博物館保存修理課長に対して次のような電報を発信している（写真10）。



当時の国立博物館保存修理課長とは文部省技官であった大岡實氏であり、福山城天守の修理を統括する立場にあった。

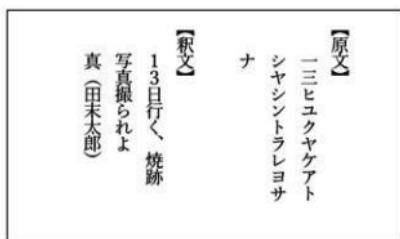
一連の電報に対する返報は、翌日になってからであった。6月6日午後4時15分に受信された北海道教育委員会からの返報は次のとおりである（写真11）。



※カッコ内は筆者加筆

北海道教育委員会では、天守焼失後の現場確認のために翌7日2名の職員を松前町へ派遣して、現場を確認させようとしていた。

さらに一日が過ぎた6月7日午後0時7分には、文部省からも次のとおり返報が届いている(写真12)。



※カッコ内は筆者加筆

電報を発信した真田末太郎氏は文部省の技官であり、天守の国宝指定に先だって調査のため来町、修理にあたっては指導官の立場にあった人物である(松前町史1993)。電報の内容は天守焼失から8日後の13日に松前入りするので現況写真を撮っておくようにとの指示である。

なお、国に対する速報の時点では役場すなわち史蹟松前奉行所跡の焼失については触れられていない。昭和24年6月5日付で松前町長佐々木豊から文部大臣及び北海道教育委員会教育長あてに提出された報告「国寶福山城(松前城)天守閣滅失報告書」(写真13)でも、史跡松前奉行所跡ではなく「町役場廳舎」として記載されており、焦点はあくまで国宝天守となっている。これは指定物件の滅失・毀損に係る条文である国宝保存法第6条及び同法施行規則第7条2項の規定に基づくものであったことによる。

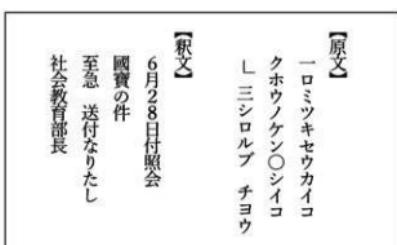
史蹟松前奉行所跡の焼失について文書での報告がなされたのは、火災から3日後の6月8日付けのことであった(写真14)。

これに続く文書として、昭和24年6月13日付で社団法人北海道通信社と北海道史跡名勝天然記念物調査委員会の連名で松前町長あてに発出された「國寶、重要美術品、史蹟、名勝天然記念物等の撮影調査班派遣について」がある(写真15)。6月18日午前に撮影調査班の近藤義七郎・内海一雄が派遣されるという内容で、末尾には18日夜に開催する座談会には写真業者・アマチュア写真家、郷土史研究家などの所蔵する福山城・松前奉行所(役場)等、焼失した建物、所蔵品などの写真、原板などを持参されるよう手配願いたい旨の記載がある。焼失現場の確認とともに、町民が所持しているであろう焼失文化財の情報を可能な限り収集する目的があったとみられる。

文部大臣及び北海道教育委員会あてに天守焼失に係る詳細報告を行ったのは、6月27日付であった。「國寶福山城天守並堀頃焼報告」がそれである(写真16)。出火の原因・場所、管理状況、飛火の箇所及びその状態、焼失の範囲、今後の対策がまとめられている。管理状況の項に、「先に國宝法隆寺焼失及び國宝松山城一部の焼失により管理の方法度合につき一層厳密を期し」とあることから、松前町側でもこれら文化財の焼損・焼失は認識していたようだ。

詳細報告と入れ違いで北海道教育委員会を通じ、6月28日付で文部省より福山城・松前奉行所跡の日常における管理状況を報告するよう通知があり(写真17)、7月5日付で北海道教育委員会から次のとおり

進捗確認の電報が届いている（写真18）。



6月27日付けで発出した報告文書において、既に天守についての管理状況が記されていたためであろうか、7月5日付けで発出された文書には史蹟松前奉行所跡の管理状況のみ記載されている（写真19）。

以上が松前奉行所跡・福山城天守の焼失関係文書である。

## 5. おわりに

嘉永2年（1849）、松前氏は海防のための築城を幕府から指示され、晴れて城持ち大名へ格上げとなった。本丸に据えられた天守は廃城後も地域住民の象徴であり、戦時中の破損を経て修理がなされようとした矢先に焼失した。

天守焼失の顛末は、炎上する様を目撃した当時の人々の証言を中心に語られてきたが、本稿では当時の電報や行政文書をもとに、文化財建造物の火災における行政機関の情報共有や連絡調整の実態を見てきた。

火災発生の初期段階では役場職員たちも消火作業などに携わっていたのであろう。文部省・北海道教育委員会への第一報はいずれも天守焼失という事実が確定してから発信されており、これ以後、行政機關同士の指示連絡事項については電報が利用されている。詳述はできなかったが、各種文書や手紙の発送・受付日を見ると、当時の郵便は発送から配達まで松前一札幌間で3~4日、松前一東京間で3~14日ほどの時間を要しているため、即時性の高い電報が有用であったと考えられる。

## 引用文献

- 青柳憲昌・安田徹也 編 2013『建築史家・大岡實の建築—鉄筋コンクリート造による伝統表現の試み』
- 大岡實 1961『松前城再建工事経過報告書』
- 田村巖 2002『北海道の電信電話年代記』—IT時代への軌跡—
- 文化庁 編 2017【新訂増補】戦災等による焼失文化財 2017—昭和・平成の文化財過去帳』
- 松前町 1993『松前町史』通説編第二巻
- 松前町 1997『松前町史』年表
- 松前町教育委員会 2017『平成28年度策定 史跡松前城跡福山城跡保存活用計画書』

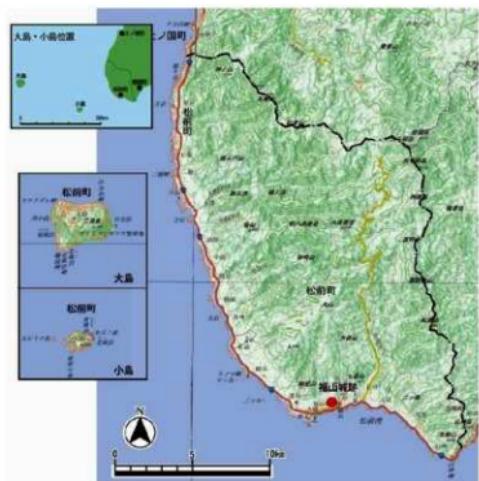


図1 松前町位置図



図2 史跡松前氏城跡福山城跡位置図

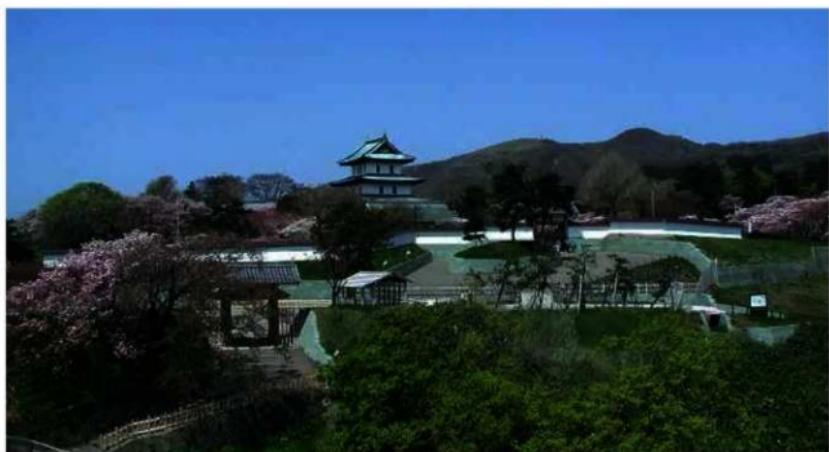


写真1：史跡松前氏城跡福山城跡 遠景



写真2：福山城復興天守の建設工事（松前町史編集室所蔵）



写真3：「國宝福山城史蹟松前奉行所跡焼失関係」簿冊



写真4：擬装網で覆われた福山城天守  
(松前町史編集室所蔵)



写真5：戦後の福山城天守 (澤田定蔵氏提供、  
松前町史編集室所蔵)



写真6：炎上する福山城天守 (齐藤克己氏提供、  
松前町史編集室所蔵)



写真7：鎮火後の松前奉行所跡 (提供者不詳、  
松前町史編集室所蔵)



写真8：鎮火後の天守（提供者不詳、松前町史編集室所蔵）



写真9：天守焼失を告げる電報頒信紙  
(松前町長から北海道教育委員会  
教育長あて)

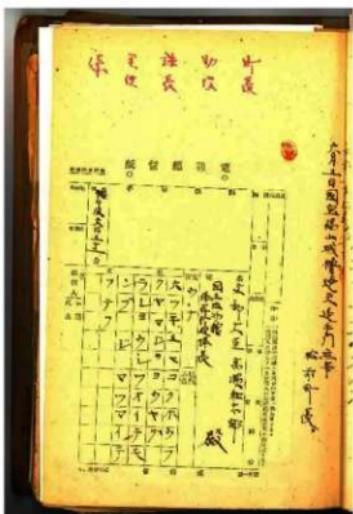


写真10：天守焼失と本丸御門の無事を告げる電報頒信紙（松前町長から文部大臣及び国立博物館保存修理課長あて）



写真11：火災調査のための職員派遣に係る電報  
(北海道教育委員会社会教育部長から  
松前町長あて)



写真12：写真撮影を指示する電報  
(文部省真田技官から松前町長あて)



写真13：國寶富山城（松前城）天守閣滅失報告書

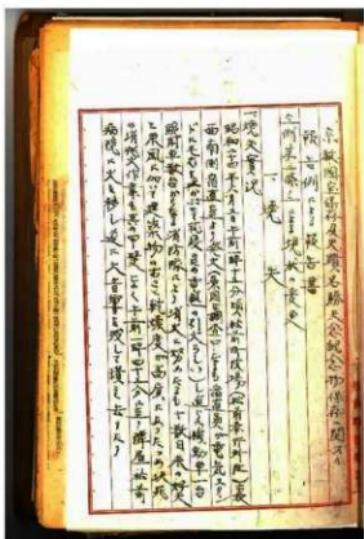


写真14：宗教國宝保存及史蹟名勝天然記念物  
保存ニ關スル報告例による報告書

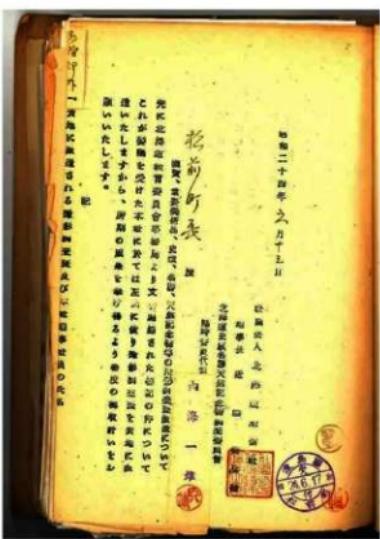


写真15：國寶・重要美術品、史蹟、名勝、天然  
記念物等の撮影調査班派遣について

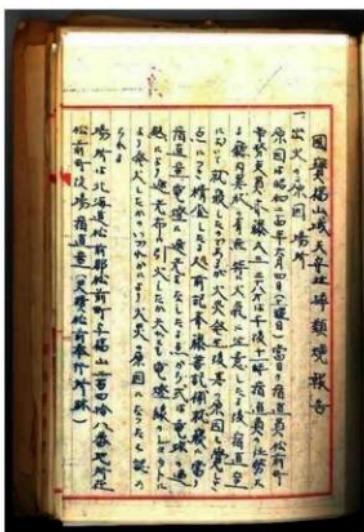
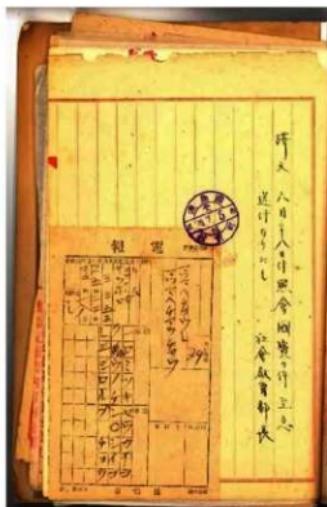


写真 16：國寶福山城天守並堀類焼失報告

写真 17：福山城天守焼失の詳細報告依頼  
(北海道教育委員会から松前町長あて)写真 18：詳細報告に係る進捗確認の電報  
(北海道教育委員会社会教育部長から  
松前町長あて)写真 19：史蹟松前奉行所跡日常における  
管理状況報告



# 藤本菓子店旧蔵の菓子木型について

Wooden Sweet Mold in the Collection of Fujimoto Confectionery

西川 茗\*

Moe NISHIKAWA\*

キーワード：近代、北海道松前郡松前町、菓子木型

## 1. はじめに

菓子木型とは、落雁、生菓子や餅を作る際に使用する、和菓子作りに欠かせない製菓道具である。木型を使用した菓子の原型は、平安時代には既に記録が見られ、江戸時代中期には型を使用した落雁が作られていた（虎屋文庫 1996）。松前町でも年中行事や冠婚葬祭の際に木型を使用した菓子は欠かせなかつたものの、近年は和菓子離れに伴い需要が落ち込んでいる。

松前町教育委員会では、平成 10 年頃、松前町在住の藤本正浩氏より菓子木型の寄贈を受けた。本資料は、松前町江良地区でかつて営業していた藤本菓子店で使用されていたものであり、本稿では、全 134 点を紹介する。

## 2. 松前町と菓子文化

北海道の最南端に位置する松前町は、松前藩が置かれた北海道唯一の城下町である。北前船交易や近江商人の進出は、物資だけではなく、多様な本州の文化を松前にもたらした。

松前藩において菓子文化が発生したのはいつのことだろうか。文化文政頃、松前奉行所勤務の役人によって記されたと考えられている歳時記『松前歳時記草稿』には、干菓子を正月飾り（蓬莱飾り）に使用するほか、年始の挨拶や精霊祭の供物とする等、3 件の記述がみられた（北海道 1969）。

行事等に用いる菓子は各家庭で作ることが多く、各

家庭にはかなりの菓子道具・技術があった様子である（大石 1977）。現在はべこもち等を自前で作る家庭は少なくなっているが、代々伝わる木型等の菓子道具を持つ家は多い。

## 3. 藤本菓子店について

藤本菓子店の位置した松前町江良地区は、町中心部から約 20km 西の日本海沿岸に位置する。慶長年間頃に南部、津軽、秋田地方より訪れた漁業者や漂流者が定住したことが町のはじまりと伝わる（北海道松前郡大島村役場 1952）。近世より江良町村といい、西在城下付の村であった（図 1）。大正 4 年（1915）の北海道二級町村制施行にともない、江良町村、清部村、原口村を大島村と改める。さらに昭和 29 年（1954）の 4 か町合併にともない、松前町字江良となった。現在町政施行から約 70 年、字別の人口は松前町で 1 番多い。

藤本菓子店の初代は明治時代に青森県から松前町に移住した。移住した当初は菓子店ではなかったが、2 代目が函館の菓子店で修業したのち、菓子店を創業したといわれている（櫻井 2014）。菓子店は商店としても営業し、藤本正浩氏の両親が平成初期まで店を営んでいたという。

## 4. 資料紹介

### （1）調査方法

木型の縦、横、厚さの長さを計測し、写真撮影を行

った。図柄、持ち手の形状、焼印や墨書きを調査し、型の分類を行った。

## (2) 木型の分類

木型の形状は岡山市デジタルミュージアム図録、深井康子氏による分類を参考にした(岡山市デジタルミュージアム 2011、深井 2005)。

### ①板型

一枚の板に図柄を彫ったものを板型に分類した。菓子を成形するのに使用するのではなく、主に図柄を付けるために使用する。板型は 5 点確認した。板全面に模様を彫り刻むものや円形に彫るもののが見られる。No.5 は唯一裏表の両面に 2 つずつ、計 4 つの彫刻が施されている。



図2 板型 (No.5)

### ②箱型

箱型の木型は、枠と図柄が彫刻された板で構成され、押し寿司のように板を菓子に押し付け模様を施す。箱型の木型は 2 点確認され、いずれも長辺が 25cm を超える大型のものであった。図柄は蓮花葉と鶴亀であり、需要の多かった慶弔各 1 点を備えていたようだ (No.6,7)。



図3 箱型 (No.6)

### ③一枚型

厚みの無い菓子を製作する場合に用いられ、下司が省略されている。一枚型に持ち手の付いたものは後述の打出しに分類した。一枚型は 8 点確認した。全長約 45cm となる大型の伸鯛の木型が 2 点確認されたが (No.70,104)、これほど大きな 1 枚の菓子を欠け無く製作するにはかなりの練度が必要であると推察する。



図4 一枚型 (No.70)

### ④二枚型

二枚型は図柄が彫られた面と、菓子に厚みを持たせる枠である下司の 2 枚で構成されており、中に餡を入れた菓子等を製作することができる。2 枚を正確に合わせるためにダボと穴が開いているほか、下司の天地を逆さまにしないよう、側面に 2 枚を重ねることで繋がるように溝を刻んでいる場合もある。二枚型は 48 点確認した。



図5 二枚型 (No.11)

### ⑤打出し

下司が省略され、一枚型に持ち手が付いたものを打出しに分類した。打出しは 70 点確認され、本調査で最多であった。松前町では現在でも盆や正月に鯛、イカ、エビ等を模した菓子が菓子店に並ぶが、これらの菓子では打出しの木型が使用されている。



図6 打出し (No.62)

### (3) 木型の図柄

本調査では多様な図柄が確認され、それらは岡山市デジタルミュージアム図録を参考に大別した（岡山市デジタルミュージアム 2011、図7）。

最も多く確認されたのが「花」35点、次いで「野菜・果物」18点である。これらは菓子に季節を添えるのに欠かせないモチーフであり、時期に合わせて適切な型を選んだため、季節の分だけ数量が多くなるのは言うまでもない。

蓮等が分類される「不祝儀」は12点、対して慶事に用いる「松と竹」「鯛」「鶴と亀」「海老」「日の出など」合計55点で、弔事と比較すると数が多い。特に「鯛」は同じ図柄であるにも関わらず様々な大きさや向きがある。鯛の菓子は結婚式の引き出物とされたほか、漁師町松前町では大量祈願の供物としても用いられ、多くの需要があり、様々な大きさや形に対応していたのだろう。

「節供」には5点が分類された。うち3点が鯉の図柄であり、5月5日の端午の節供に男児のお祝いとして用いられたのだろう。

「地方色」では魚介類を主とし、魚の切身、帆立貝、スルメイカ等の計5点を確認した。魚類や魚の切身の木型は東北地方で製作される（岡山市デジタルミュージアム 2011）。前述のとおりイカの菓子は現在でも用いられ、今回の図柄は耳が小さいスルメイカであった（No.116）。松前では6月から12月に水揚げされ、昆布とともに結婚式や正月には欠かせない魚介類である。

「地方色」で2点確認された「菊一」にも触れておきたい（No.113,123）。半菊に一字を重ねた意匠「菊

一」は山形県鶴岡市で伝承される雛菓子に欠かせないモチーフで、鶴岡独自のものであり、鶴岡雛菓子以外には、まず見ることはできないという（鶴岡市企画部食文化創造都市推進課 2023）。更に、この鯛や縁起物をかたどった菓子を盛り合わせた「鶴岡雛菓子」は、松前町を含む北海道に見られる正月の文化「口取り」に類似している。地理的に離れた2都市に共通するのが「北前船」である。松前と鶴岡は、北海道と大阪の間を商品を売買しながら航海した北前船の寄港地として栄えた。日本海を航行した北前船が、物資だけではなく菓子文化も運び、松前に伝えたのではないだろうか。

### (4) 木型の持ち手

吉田隆一氏によれば、東北で製作された菓子木型の持ち手は、基本的に断面が四角形、長方形のものが多いという（吉田 2012）。後段で述べるように今回製作地が確認された木型のほとんどが青森市と函館市で製作されたものであるが、持ち手の付いた72点のうち、71点が東北地方の特徴であるとされる四角形の持ち手を有していた。1点丸型の持ち手が確認されたが、そちらについては（7）で触ることとしたい。

### (5) 木型にみられた焼印

計134点のうち、77点の木型に焼印が確認された。焼印は木型の所有者ではなく製造者を表す場合がほとんどで、最も多かったのが「元木商店」のもので30点、次に「函館まきの」で21点、「一八十（屋号）」で20点である。「元木商店」は4種の焼印が確認されているが、それぞれの使用時期等は不明である。現在、木型の製作は行っていないが、卸問屋「株式会社元木商店」として営業を続けており、木型製作に使用した彫刻刀や型紙が残っているという。「函館まきの」「一八十（屋号）」については詳細が不明であり、今後も調査を継続したい。

### (6) 木型にみられた墨書き

51点の木型に墨書きが確認された。多くの場合は図柄の名前、大きさ等が側面に記されており、積み上げて

保管した木型から、必要に合わせたものを素早く取り出せるようになっているのだろう。資料のうち年代が明記されているのは 1 点のみで、「昭和九年八月■日之求」と記されている (No.114)。

#### (7) 特徴的な木型

割れ、ひびが入った木型を修理した痕跡がある資料は、5 点確認された。うち 4 点は割れた木材に鎌を打ち修理し、1 点のみ、木型とは別の小さな木材の両端に釘を打ち、ひび割れた箇所を連結して修理していた。破損した木型も修理することで繰り返し使用していた様子が分かる資料である。

(4) にて持ち手の付いた 72 点のうち、71 点が東北地方の特徴であるとされる四角形の持ち手を有していたと述べたが、丸型の持ち手を有した 1 点が No.109 である (図 8)。まず、菓子木型は、堅いサクラ等の木材を用いることが多く (深井康子 2005)、本資料の木型も殆どが堅い材質である。しかし No.109 の材質は明らかに柔らかく、木材がさくくれ立っている。また、細部まで精緻に彫刻されている他資料と比べ、線も大雑把で職人の仕事とは考えにくい。太い持ち手の形状とその材質から、本資料は薺打ちに用いる横槌を転用し、非職人が製作した木型ではないかと考える。

#### 5. おわりに

本稿に先立ち、松前町郷土資料館では令和 5 年 9 月 1 日から 12 月 10 日までミニ企画展「手しごと—松前の菓子木型—」を開催し、約 400 名の方にご来場いただいた。本展示のため、令和 5 年 8 月には、昭和 26 年 (1951) 創業、松前町字松城で現在も営業する菓子店「中村屋」の取材を実施した。同店は 100 点以上の菓子木型を所蔵しており、廃業した菓子店等から譲られたものも多いという。今後松前町内に現存する木型の調査、さらにはその製作地の調査を進め、松前町の傾向や流通について明らかにしたい。

最後に快く調査、取材にご協力いただいた株式会社中村屋様、株式会社元木商店様、末筆ながら記して厚く御礼申し上げます。

#### 参考・引用文献

- 荒井美津子ほか 2013 「餅菓子文化の伝承 第Ⅱ報—江差・上ノ国・松前の「ベコモチ」—」『北海道文教大学研究紀要 第 37 号』
- 大石雅二 1977 「菓子に関する研究—松前地方の餅をして—」『北海道開拓記念館調査報告 第 14 号』
- 岡山市デジタルミュージアム 2011 『菓子木型一和のかたち—』岡山市デジタルミュージアム
- 尾曲香織、舟山直治 2020 「厚沢部町における食と儀礼—かだっこ餅を中心として—」『北海道博物館研究紀要 第 5 号』
- 櫻井美香 2014 「小樽における菓子文化の基礎研究 2—菓子木型における地域的比較研究にむけて—」『小樽市総合博物館紀要 第 27 号』
- 鶴岡市企画部食文化創造都市推進課 2023 『つるおか伝統菓子伝承事業「鶴岡離菓子」調査報告書 (R4 年度追加調査)』
- 徳力彦之助 1975 『落雁 増補改訂版』三彩社
- 刀禪武夫 1977 『松前菓子雑話』『松前藩と松前 10 松前町史編纂室』
- 虎屋文庫編 1996 『菓子型の世界』展』虎屋
- 永井秀夫監修 2003 『日本歴史地名大系 1 北海道の地名』平凡社
- 深井康子 2005 「菓子木型の形と歴史に関する基礎的研究」『富山短期大学紀要 第四十卷』
- 北海道 1969 『新北海道史 第七巻 史料一』
- 北海道松前郡大島村役場 1952 『大島村勢要覧』
- 松前町史編集室編 1988 『松前町史 通説編 第一巻下』松前町
- 吉田隆一 2012 「謎の多い菓子、落雁 奥深い菓子型の世界」『蒐める楽しみ 吉田コレクションに見る和菓子の世界』虎屋

表1a. 藤本菓子店旧蔵の菓子木型

No.	図柄	大きさ (幅×高さ cm)	厚さ (cm)	型の分類	焼き印	墨書き	備考
1	菱、二鶴格子	9.1×18.0	2.4	板型			
2	雁目、千筋	9.2×18.2	2.4	板型			
3	蓮葉	10.6×16.9	2.5	板型		蓬莱 V630	
4	亀甲	12.1×18.0	2.2	板型			
5	(表) 唐松、青梅波(裏) 鶴、菊	7.1×18.0	2.1	板型			裏表
6	蓮花葉	30.7×26.7	2.3	箱型	龜		外枠かく取り出せサ"
7	鶴亀	23.6×30.0	2.0	箱型	高畠		外枠かく取り出せサ"
8	蓮花	9.9×16.7	4.8	二枚型	青森市鶴町元木商店		側面に溝
9	八重菊	8.9×17.7	4.0	二枚型	青森元木製 龜 波		側面に溝
10	竹	18.0×28.8	3.7	二枚型	青森元木製		側面に溝
11	竹	18.1×10.6	4.3	二枚型	青森市鶴町(現号)元木商店		側面に溝
12	梅巻	7.9×15.5	4.7	二枚型	青森市鶴町元木商店		側面に溝
13	桜把	8.8×16.6	4.7	二枚型	青森市鶴町元木商店		側面に溝
14	五階の松	10.2×19.9	4.4	二枚型	■		
15	日の出松	9.4×17.8	3.7	二枚型	青森市鶴町子用具一式(蓬号) 元木商店		側面に溝
16	桔梗	9.6×14.6	5.1	二枚型	青森市鶴町元木商店	松前	
17	鰐	17.7×48.5	5.0	二枚型	青森市鶴町元木商店		
18	牡丹	9.1×16.4	3.7	二枚型	曲面まきの	ボタン五寸五分台引	
19	竹	9.9×18.2	4.2	二枚型	曲面まきの	竹引カ	内面に折縫跡あり
20	鰐	11.7×31.5	3.4	二枚型	曲面まきの	八寸盤 L.100	
21	綿	8.6×24.3	3.2	二枚型	曲面まきの	六寸コイ 750 850	
22	海老	6.9×18.1	4.2	二枚型	曲面まきの	450	
23	鶴前	16.7×9.1	3.6	二枚型	曲面まきの	五寸五分■引ブドウ	
24	八重菊	8.8×16.4	3.6	二枚型	曲面まきの	五寸五分台引菊 550	
25	丸綿	9.9×18.3	3.4	二枚型	曲面まきの	丸綿 600	
26	九重菊	7.3×24.1	4.9	二枚型	曲面まきの	九重菊 1100	
27	大平	8.9×33.4	3.5	二枚型	曲面まきの	オヒラ ■■ 1150	
28	荀	16.6×28.7	3.9	二枚型	曲面まきの	五寸五分台引竹の手	
29	胡麻、楓葉、雨カ	6.9×27.2	4.5	二枚型	曲面まきの	900 15	
30	椿	9.7×19.8	4.7	二枚型	一八十 龜		2.5寸幅袖形
31	蓮花葉	11.5×19.8	4.7	二枚型	一八十 龜		1.5寸幅袖形
32	八重菊	10.4×15.3	4.7	二枚型	一八十		1.5寸幅袖形
33	板	10.8×14.7	4.0	二枚型	一八十		側面に溝
34	鶴前	10.7×14.6	3.6	二枚型	一八十		1.5寸幅袖形
35	唐松	32.4×8.2	3.8	二枚型	一八十		
36	九重菊	9.1×15.0	5.1	二枚型	合脚押しましアサイ	九重菊	側面に溝
37	竹	18.0×10.1	4.5	二枚型		竹 六寸台引	
38	桃	9.3×14.8	3.0	二枚型			
39	舞鶴	16.6×8.4	3.4	二枚型		1	39-43で組み合せ可能
40	竹	8.1×16.7	3.4	二枚型		2	39-43で組み合せ可能
41	三階の松	8.4×16.7	3.1	二枚型		3	39-43で組み合せ可能
42	梅	16.6×8.4	3.4	二枚型		4	39-43で組み合せ可能
43	尾亀	8.3×16.7	3.3	二枚型		5	39-43で組み合せ可能
44	海老	10.2×18.5	5.0	二枚型		エビ 六寸台引 450	
45	三階の松	9.9×15.2	4.3	二枚型		六寸松 600	側面に溝
46	日の出松	9.2×15.2	5.1	二枚型		5.5寸台引松 松 420 (表モ)	
47	蛤	9.9×15.1	5.0	二枚型		5.5寸台引蛤 蛤 (マモ) 420	内面に折縫跡あり
48	蜘蛛	18.2×40.4	3.9	二枚型			蜘蛛は打て留めてある
49	丸綿	17.5×10.2	3.4	二枚型			
50	無し(角型)	6.9×33.0	4.5	二枚型		550	

表1b. 藤本菓子店旧蔵の菓子木型

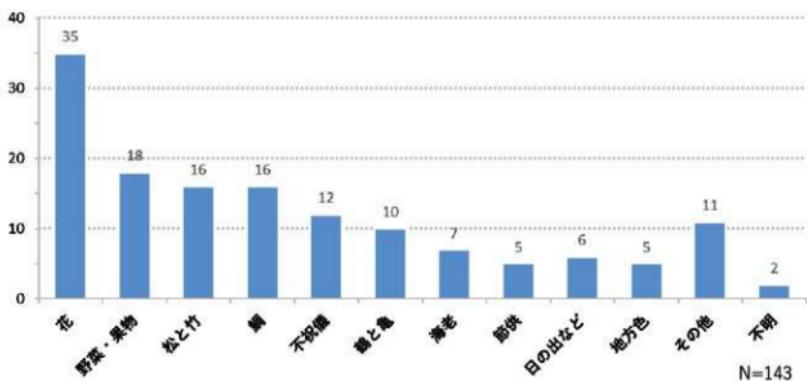
No.	図柄	大きさ (幅×高さ cm)	厚さ (cm)	型の分類	焼き印	墨書き	備考
51	牡丹	8.7×16.5	2.1	二枚型	青森元木製 龍 波	松前 十七號	面のみ
52	猩猩	9.3×16.0	2.3	二枚型		5	面のみ 側面に溝
53	菊	9.1×15.4	2.3	二枚型			面のみ 側面に溝
54	不明	10.2×18.1	1.8	二枚型			下司のみ
55	不明	10.5×17.9	2.0	二枚型			下司のみ
56	鮎	7.4×20.0	2.4	一枚型	青森元木製	第二號 第二號 第一號 松前 郡江良町	
57	かぶら	9.3×17.9	2.1	打出し	青森市田町元木商店		
58	胡瓜	8.4×18.9	1.8	打出し	青森市田町元木商店		
59	桜把	9.0×17.9	1.4	打出し	青森市田町元木商店		
60	松竹梅	9.2×20.6	2.3	打出し	青森市田町菓子用具一式 (蟹身) 元木商店		
61	すくみ鶴	9.1×19.1	2.3	打出し	青森市田町元木商店		
62	海老	9.3×19.0	1.9	打出し	青森市田町元木商店		
63	仲鶴	10.3×21.4	2.1	打出し	青森市田町元木商店		64と対か
64	仲鶴	10.2×21.5	2.2	打出し	青森市田町元木商店		63と対か
65	仲鶴	10.0×21.8	2.1	打出し	青森市田町元木商店	■■■■ 游島櫻三郎の鶴江町	
66	寒菜と花葉	11.1×21.2	2.2	打出し	青森市田町元木商店	福山芦	
67	鶴丸	12.4×26.1	2.2	打出し	青森市田町菓子用具一式 (蟹身) 元木商店		
68	高砂	11.4×23.2	2.6	打出し	青森市田町打出し用具一式 (蟹身) 元木商店		
69	仲鶴	16.0×32.0	2.5	打出し	青森市田町元木商店		1号判袖形
70	仲鶴	17.9×45.1	3.6	一枚型	青森市田町元木商店		
71	仲鶴	7.0×21.2	2.2	打出し	青森市田町菓子用具一式 (蟹身) 元木商店		
72	海老、仲鶴	8.6×22.2	1.7	打出し	青森市田町元木商店	大日本精銅社 ■■■	
73	丸角、萬葉	8.4×21.1	2.1	打出し	青森市田町元木商店		
74	五七の桐	8.8×18.2	2.1	打出し	青森市田町 (蟹身) 元木商店		
75	牡丹、椿	12.7×26.1	1.6	打出し	青森市田町元木商店		
76	無し (丸型)	6.7×14.1	2.4	打出し	面鋸まきの	100	
77	魚の切り身	7.8×15.7	2.1	打出し	面鋸まきの	切り身	
78	帆立貝	7.7×15.9	2.3	打出し	面鋸まきの	ホタテ貝 (小)	
79	竹	19.2×9.8	2.4	打出し	面鋸まきの	六寸台引竹	
80	福梅	9.4×18.9	2.3	打出し	面鋸まきの	六寸五分引竹	
81	海老	7.4×18.1	2.2	打出し	面鋸まきの	四寸海老	
82	海老	8.1×19.1	2.0	打出し	面鋸まきの	四寸五分海老	
83	海老	9.6×23.0	2.0	打出し	面鋸まきの	五寸五分海老	
84	三つ巴	6.5×17.3	2.2	打出し	面鋸まきの	三ツ巴	
85	日の出柳枝に眉	11.8×24.0	2.0	打出し		一八十	
86	八重菊	11.7×23.7	2.0	打出し		一八十	
87	牡丹	11.4×25.6	2.0	打出し		一八十	△
88	福に流水	11.5×24.5	2.0	打出し		一八十	
89	蓮花	12.8×21.7	2.2	打出し		一八十	
90	牡丹	12.4×28.8	2.0	打出し		一八十	
91	若荷	11.4×21.1	2.1	打出し		一八十 向島	
92	蕨	11.6×20.6	2.1	打出し		一八十 向島	ミミ ■■■ 代頭 ■■残
93	松茸	10.0×25.0	2.3	打出し		一八十 向島	■■■■
94	寒花	7.0×31.2	2.9	打出し		一八十	裏面に廻り
95	松竹梅	7.7×37.3	1.6	打出し		一八十	
96	蓮花	6.6×26.5	2.9	打出し	一八十		二枚型のようだが、上型と下型が衝止めされている
97	花	6.6×34.1	1.5	打出し	一八十 八四		
98	福梅	8.0×37.4	2.3	打出し	一八十 ○に刀		
99	薔薇	6.7×33.4	3.8	一枚型		270	内部は金属、側面フレーム「新発白光陶器製製器」
100	松	7.9×15.0	2.6	打出し			開り合「○○○」

表1c. 藤本菓子店旧蔵の菓子木型

No.	図柄	大きさ (高×横 cm)	厚さ (cm)	型の分類	焼き印	墨書き	備考
101	乱菊	9.1×17.9	2.2	打出し	六上		
102	仲鶴	15.5×30.5	2.6	打出し			丸りか、○□: 1カ所袖形
103	福梅	4.6×24.1	2.5	一枚型	○△△		2カ所袖形を有十六あり
104	仲鶴	10.1×45.3	3.5	一枚型			
105	(表) 龍目、格子 (裏) 桟、蘆葦	9.0×17.9	2.3	(表) 板型、(裏) 一枚型			裏表
106	兎	7.1×14.2	2.5	一枚型			
107	亀甲	9.0×14.3	2.1	一枚型			
108	尾兔	10.0×18.2	3.2	一枚型			
109	(表) 魚、(裏) 花、瓢箪	11.6×21.1	3.9	打出し			裏表 非職人の作か、模様の転用か。
110	(表) 丸に寿、(裏) 丸に竹	15.0×11.7	3.9	打出し			裏表
111	瓢箪	16.5×5.9	2.3	打出し	120		
112	扇	18.4×5.7	1.9	打出し	ワ ■		
113	菊一	7.9×16.6	2.2	打出し			(押抜下形)
114	牡丹	10.1×22.7	2.1	打出し			(背面 ■■■■■■■■■■表(側面) 昭和九年八月■日之求)
115	三陽の松	10.3×21.3	2.1	打出し			福山市■■■■■■■■■■
116	スルメイカ	8.6×21.6	2.4	打出し			内側面に緑色付着
117	仲鶴	9.6×22.1	2.1	打出し			
118	仲鶴	9.9×20.1	2.1	打出し			
119	(表) 無し (花型) (裏) 薔薇	8.4×31.0	2.0	打出し			裏表
120	祝	8.5×36.2	2.2	打出し			
121	尾角、鷹鶴	10.5×36.5	3.1	打出し			
122	福梅、勇鶴	8.4×20.8	1.9	打出し			1カ所袖形
123	扇、菊一	8.3×25.1	2.0	打出し			
124	柿、萬葉	11.1×31.1	1.9	打出し			
125	薺(スジソ)	11.6×26.5	2.5	打出し			
126	花	5.7×26.5	1.9	打出し			内側面に緑色、赤色付着
127	花	6.2×23.5	1.8	打出し			内側面に緑色付着
128	花に木瓜	6.7×23.5	2.7	打出し			
129	花に福上菊	6.9×36.9	1.6	打出し			
130	(表) 無し (丸型)、(裏) 花ご形、魚、花・花菱、十六瓣菊	7.6×25.5	2.2	打出し			内側面に赤色付着
131	花	7.5×27.0	1.7	打出し			
132	花	12.7×29.8	2.2	打出し			
133	桃	5.6×31.0	2.0	打出し			
134	竹	10.0×33.0	2.2	打出し			



図1 大正初期の江良下町通り 『北海道松前郡江良町村 写真案内帖』木村喜一郎氏所蔵・松前町史編纂室写し



※1点につき複数の図柄が施されている場合があるため点数を上回っている

図7 木型の図柄



図8 特徴的な木型 (No.109)

松前町  
郷土資料館  
研究紀要

第1号

---

2024年3月31日 発行

編集・発行 松前町教育委員会 文化社会教育課  
〒049-1594 北海道松前郡松前町字神明30番地

連絡先 TEL 0139-42-3060

MAIL [bunkazai@town.matsumae.hokkaido.jp](mailto:bunkazai@town.matsumae.hokkaido.jp)

---





まつまえの  
文化財